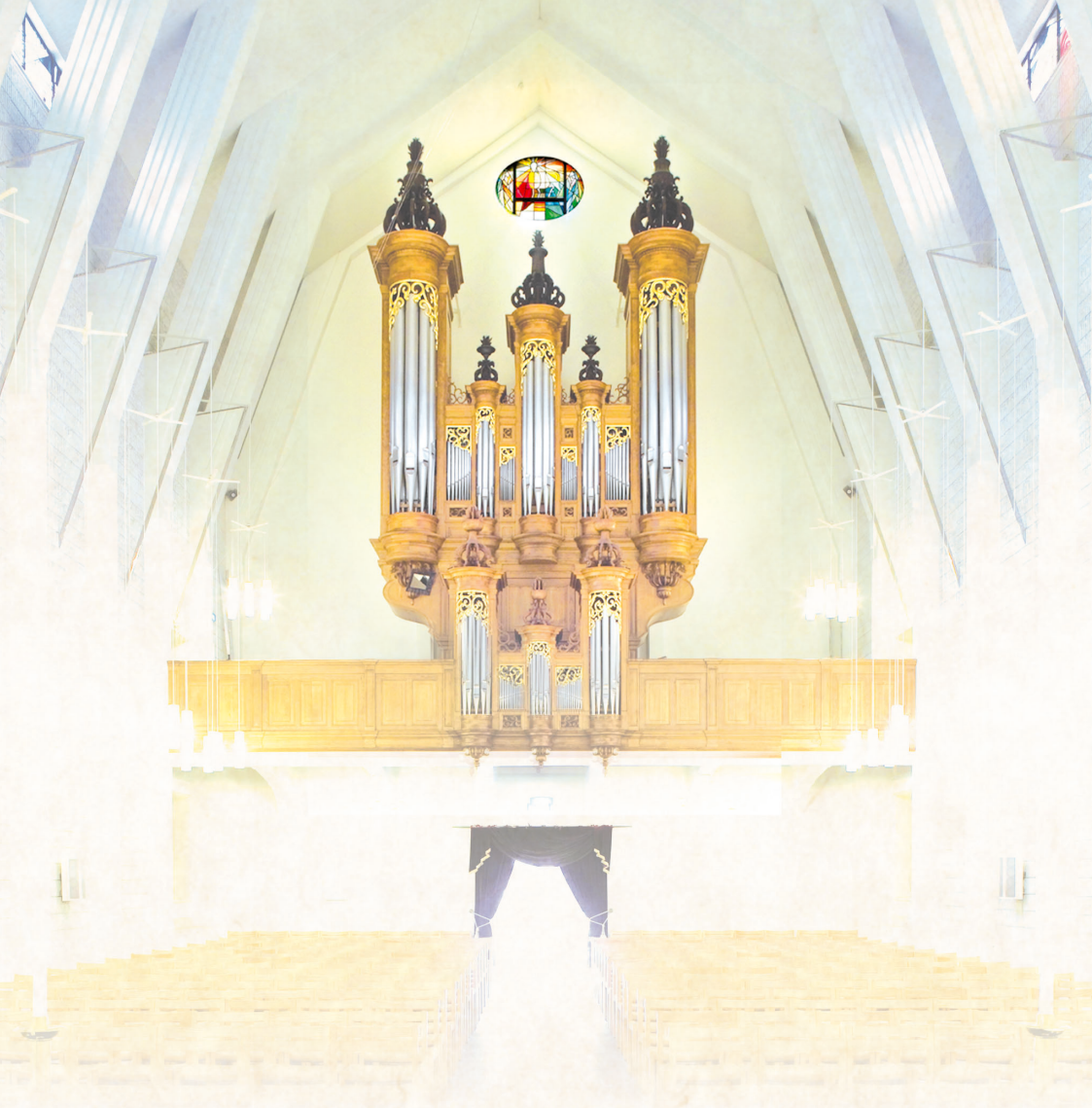




©K.Miura

神戸松蔭とバッハ・コレギウム・ジャパン

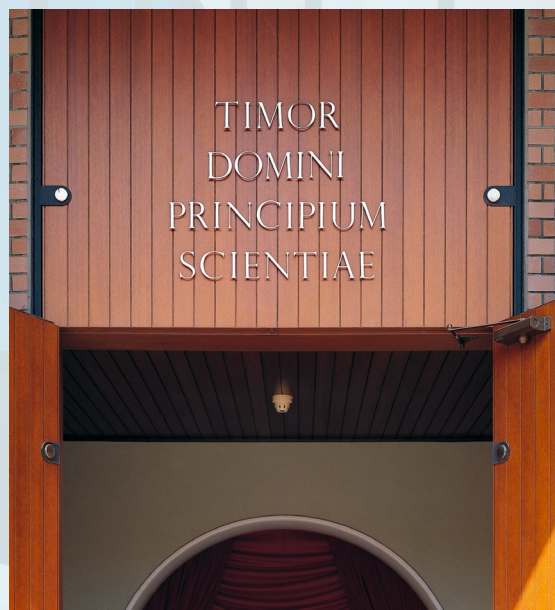
～神戸松蔭チャペルコンサート200回の歩み～

Kobe Shoin Chapel Concert 200th Anniversary





オルガン上部のステンドグラス「神秘の子羊」



チャペル扉：ラテン語の聖句「主を畏れることは知識の初め」(旧約聖書：箴言1章7節)

巻頭挨拶



チャペルに命を吹き込むもの

学校法人 松蔭女子学院
理事長 川崎 紘平

神戸松蔭を舞台に、BCJの音楽の伝統が、またひとつ築かれましたことに感謝いたします。また、力を合わせてすばらしい音楽を作られた皆様方にお祝い申し上げます。私たちにとっても誇らしいことです。松蔭にすばらしいチャペルという空間が生まれたとき、いったいどんな働きが出来るのだろうかと期待と不安がありました。今、20数年を経て、チャペルが一人ひとりの祈りの場であると同時に、音楽やさまざまな文化の創造の場所、発信の場所として定着しようとしています。BCJの粘り強いご努力がチャペルにこうした命を吹き込んだことは明らかです。神戸松蔭のチャペルがこれからも、学生や教職員、そして近隣の皆様方と共に祈り、集い、音楽や多彩な催しを楽しむ空間に育ちますように。

そして、BCJが新しい伝統を目指して、美しい音楽を提供していただきますように。



シメオンの確信

日本聖公会 神戸教区 主教
学校法人 松蔭女子学院 院長
中村 豊

聖マリアは産後40日目、イエスを抱いてエルサレムの神殿に詣でました。そのときシメオンという人が霊の導きにより乳児に近づき、その子を抱いて「わたしはこの目であなたの救いを見ました。この救いは異邦人を照らす啓示の光です」と詩で表現しました。イエスの時代に聖堂で聞くこの最初の賛歌(NUNC DIMITTIS)を歌ったシメオンは、イエスを通して明らかにされる神の啓示はイスラエルの人たちだけではなく全世界の人に、その賛美を通して伝えられると確信したのでした。

神戸松蔭女子学院大学チャペルで200回にわたり演奏された曲目のそのほとんどはJ.S.バッハを中心とする欧米のキリスト教音楽でした。作詞、作曲者の、凝縮されたキリスト教信仰の表現を、演奏者がとらえ、それが聴く者の心の琴線にも触れ、すばらしい音となってチャペル中に響き渡り、それが今日まで継続してきたといえます。

2000年前のシメオンの確信が松蔭のチャペルで見事に表現されてきたことを心から喜びたいと思います。

◆神戸松蔭チャペルコンサート200回記念のお祝い



神戸市長
矢田 立郎

1981年から開催されてこられた神戸松蔭チャペルコンサートが200回を迎えられ、記念誌が発行されましたことを、心からお慶び申し上げます。

神戸松蔭女子学院大学は、神戸における知の拠点のひとつとして、優秀な人材を輩出されるとともに、チャペルコンサートを定期的に開催し、神戸の音楽文化の向上と発展に努めてこられました。その長年にわたる関係者の皆様方のご努力に対し、深く敬意を表します。

芸術文化は、まちににぎわいと活気を生み出すとともに、生活に潤いをもたらします。神戸市では平成16年に、神戸らしい特色ある文化や、これらを生かした神戸の未来の方向性などを市民のみなさんと共有する基本理念として「神戸文化創生都市宣言」を行い、芸術文化を生かしたまちづくりを進めております。

皆様方におかれましては、「音楽のまち神戸」の推進に向けて、引き続きご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、神戸松蔭女子学院大学の今後ますますのご発展をお祈りいたしまして、ごあいさつとさせていただきます。



神戸市教育長
橋口 秀志

この度は、神戸松蔭チャペルコンサートが200回目を迎えましたことに、心よりお祝いを申し上げます。このチャペルコンサートは、第1回目の演奏会より、J.S.バッハの作品を中心としたバロック音楽を演奏され、高い評価を受けていると聞いております。

さて、貴大学は、キリスト教の精神に基づく、リベラル・アーツの教育の伝統のもと、一人ひとりの個性を大切に教育に取り組まれています。本市教育委員会とも手を結び、市立小中学校で教育活動を補助するスクールサポーター制度や神戸市立幼稚園でのボランティア活動に、貴大学の多くの学生が参加していただいておりますことに厚く御礼申し上げます。

今後も、素晴らしい独自の教育活動を展開してこられました貴大学が、その特性を存分に発揮され、時代の要請にこたえ、社会の中核として活躍する人材を輩出していただけると期待しております。

最後になりましたが、200回の演奏会にご尽力いただきました、主催者、出演者はじめ関係各位に敬意と感謝を表しますとともに、貴大学の益々の発展とチャペルコンサートのさらなる発展を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



神戸市灘区長
三好 正英

神戸松蔭チャペルコンサートが200回を迎えられましたことに、心からお祝いを申し上げます。神戸松蔭女子学院大学は、昭和56年に、現在の地にキャンパスを移されました。その際、灘区のまちの景観にふさわしい建築となるよう心を尽くされたとお聞きしております。キャンパスの中央に建てられたチャペルにはパイプオルガンが設置され、これまでに世界中から高名な演奏家が招かれ、優れた音響設備を活かした芸術性の高いコンサートが開かれました。

灘区では、大学の力を活かしたまちづくりを進めております。平成17年11月8日には、貴大学と灘区との間で連携協力に関する協定を締結いたしました。その後、教育や子育てなど、さまざまな分野で専門的な知識や若い学生の力で協力していただいております。

200回というおめでたい節目を迎えられましたが、引き続き地域の中の大学として多くの区民に、素晴らしい音楽に触れ、楽しみ、交流する機会を提供していただきますよう、今後ますますのご発展をお祈り申し上げてお祝いのことばといたします。



Leiter des Goethe-Institut Japan
Leiter der Region Ostasien
Dr. Uwe Schmelter

ドイツ文化センター所長／
東アジア地域代表

Dr.ウーヴェ・シュメルター

Grußwort zum 200. „Chapel Concert“ von *Bach Collegium Japan* an der Kobe Shoin Women's University

Es ist beeindruckend, dass die Musik von Bach und die Barockmusik generell hier im fernen Land durch die Aktivitäten von *Bach Collegium Japan* tiefe Wurzel geschlagen hat und große Beliebtheit unter dem japanischen Publikum genießt. Ich wünsche Ihnen weiterhin viel Erfolg.

ドイツを代表するバッハの、そしてバロックの音楽が、バッハ・コレギウム・ジャパンの熱心な活動により、遠い日本でこのようにしっかりと根づき、みなさまに愛されていることに深い感銘を覚えます。今後のいっそうのご発展をお祈りいたします。

神戸松蔭チャペルコンサート200回を記念して

神戸松蔭のチャペルで200回にわたってコンサートが続けられてきたことは、大きな喜びであり、同時に驚きでもあります。思えば、今年オルガン完成からちょうど25年めにもあたるわけですから、ずいぶん長い年月が過ぎてきました。その間のひとこまひとこまが走馬灯のように思い出されますが、記念誌の発行というよい機会を与えていただきましたので、過ぎ越しかたを少し振り返ってみたいと思います。



《チャペル建設》

私をはじめこの六甲の地を訪れた時、チャペルはまだ存在せず、巨大な剥き出しの土の斜面があるだけでした。果たしてこんなところに、本当にチャペルが建つのだろうか、と思ったものですが、それは私がまだオランダに住んでいた1980年のことであつたと思います。すでにオルガンを建造することが決まっていたマルク・ガルニエさんとともに大阪の竹中工務店を訪れ、音響についての詳しい検討会議が行われました。すでにそれまでの数年間にわたって、本学の平島達司先生と竹中工務店音響研究所の村井さんを中心とするチームが何度かヨーロッパを訪れ、各地の教会の音響測定やオルガンについての検討が重ねられていましたので、それらのデータを元に、理想的な音響に向けての活発な議論が行われました。チャペルの模型を机上に据えて、その中で音響実験データなどの説明を受けたとき、何か胸が躍るような気持ちを抑えきれませんでした。

平島先生がこのプロジェクトの中心でしたが、先生は単に化学者としての態度でオルガンと音響の研究をされただけでなく、音楽をこよなく愛する人としての情熱と直感の人であつたと思います。世界一美しいチャペルとオルガンを完成する、という目標に、これほど純粋に邁進できることが、既に奇跡のようにさえ思われました。

その1年後、六甲の斜面にもぐるようにしてチャペルが完成し、松蔭女子学院大学と短期大学の統合学舎が完成したのでした。(当時は、まだ「神戸」は名称についていませんでした。)1982年の1月、私は再びガルニエさんとともに訪れ、今度は模型ではなく、実物の中で音響実験が行われました。

当時は、オルガンが巨大な吸音体になるであろうことは想像できたものの、オルガンの設置前と完成後で、どの程度の違いが出るものかがはっきりとわからなかったのです。そこで、竹中工務店の方がオルガンと同じ体積のグラスウールをオルガンギャラリーにおいて、仮の吸音体としてありましたが、それでもチャペルの中は、日本とは思えない、まるでヨーロッパの教会堂のようによく響いていました。特に、低音だけでなく、高い音が最後まで減衰しないことが、美しい印象を与える大きな要因でした。その響きが消え去るまで何度も耳を

傾けていたガルニエさんが、いきなり階段を駆け下りて、竹中の村井さんと喜びの握手をしたことがとても印象的でした。

このチャペルは決して音楽のためにできたものではありません。この場所は、一にも二にも神礼拝のための場所です。そして、オルガンがそのような教会の建物とともに育ってきた楽器だからこそ、オルガンにふさわしい音響を求めることが、同時によい教会堂建築への足掛かりとなるのです。

オルガンのためによく響く空間は、言葉のためには不向きだと思われますが、それは誤解です。特に礼拝における説教は、決してただ物理的に明瞭であれば人の耳に届くのではなく、靈感を受けて語られることこそ大きな力の源となるのです。ですから、教会堂はそのような靈感を与える場としての使命を果たすべく、視覚的にも聴覚的にも美しく整えられねばなりません。

松蔭のチャペルは、そのような意味において、それを取り巻く人々の信仰と希望、そして様々な研究成果をもとに、丹精を込めて完成された稀有な建物と言えるでしょう。天井の梁の入れ方、聖壇や床の黒御影石、ひとつひとつの椅子の製作にいたるまで、微にいり細にわたって丹念な意匠が施されました。なかんづく、壁にスリットを開けて音響の微調整を行うことにまですしたのは、本当にこのチャペルに賭ける松蔭の意気込みの象徴であつた、といってもよいでしょう。



《オルガン建造》

このようにして、チャペルの音響が十分に確かめられたあと、はじめてオルガンの製作が始まりました。チャペル建築の当初からオルガンビルダーが参画する、などということはほとんどの場合不可能ですが、この松蔭においては、当初からガルニエさんとの理想的な関係が生まれました。当時の学長であられた友枝先生の、ガルニエさんに対する信頼はいかなる時にも揺るぎなく、そのことが後のチャペルコンサートやあらゆる活動にとっての最大の原動力であつたことは言うまでもありません。

「オルガンにとって最も厳しい条件の中で組み立てた方が、問題点が浮き彫りになっていいだろう」というガルニエさんの楽観的な予測のもとに、83年の6月から9月という酷暑の時期が組み立てに選ばれました。スイスのア



ガルニエ工房のスタッフ(マルク・ガルニエ氏は左から3番目)

ルプスを一望できるところに住む彼らは、日本の夏がどれほど暑いか知らなかったのです。本当に、それはそれは大変な仕事でした。当時はまだ冷房はなく、そのうえオルガンの最も高い部分にまで上って仕事をするのですから、彼らの頭の中はほとんど沸騰していたと思います。しかし、彼らが未だに「これ以上楽しい時期はなかった」と回想するのは、若い職人たちが日曜日ごとに学生とピクニックにでかけたり、平島先生や荒井先生たちの配慮で食事にお招きを受けたり、すばらしい交流があったからでしょう。ガルニエと6人の職人さんたちは、学内の宿直室に宿泊して、昼と夜の食事を3階のオリエンタル・ホテル直営のレストランでとっていたので、レストランの人々の心づくしもまた大きな要因だったに違いありません。

全学を挙げてのオルガン組立が終わり、11月にお披露目のコンサートが3日間にわたって行われました。トン・コープマンとエリザベト・ガルニエ夫人、そして私が交代で演奏し、3日間に4回ものコンサートを行いました。招待客のほかに抽選で選ばれた聴衆とあわせて毎回400人ほどもチャペルに入ったので、長い残響がなくなってしまうか、と思うほどでしたが、それでも、実は日本のどこのコンサートホールよりも長い音響が保たれていたのです。このときの演奏会を録音して、記念LPレコードも製作されました。



《コンサート開始》

さて、チャペルコンサートのシリーズそのものは、私がまだ帰国する前の1981年から、すでに平島先生の個人的な企画で開始されていました。私は、82年の1月に、ひどい風邪をひきながら第2回のチャペルコンサートに初めて出演したことを鮮明に覚えています。当時は、故辻宏さん製作の小さなオルガンがチャペルにおかれてあり、そのオルガンを用いて演奏したのです。それが私のチャペルでの最初の演奏でした。

83年11月のお披露目コンサートの後から、平島先生と相談して、私が責任をもって企画するようになりました。はやる心を抑えつつ一歩ずつの歩みではありましたが、オルガンだけではなく、オーディションをして「松蔭室内合唱団」を結成し、宗教音楽の様々な分野がここで演奏できることを夢見ながら、手探りで進んでいったのです。

最初の大きな転機となったのは、まず1985年のJ.S.バッハ生誕300年の年です。これは、J.S.バッハに関する久々の重要な記念年でしたから、全世界で多くの催しが企画されました。しかし、私たちのチャペルでは、まだ何も大きな企画はできません。そこで、ささやかながら、初めてカンタータの夕べを試みたのです。

時宜にかなったカンタータを、すばらしいチャペルで演奏してみると、音楽という賜物が、すべての言葉を超えてどんなに大きな、励ましと慰めの力を持っているか、衝撃をもって体験できました。このことは、ずっと後に阪神大震災の際、このチャペルで行ったチャリテ

ィーコンサートのときにも、現実のこととしてひしひしと味わったのです。

初めてのカンタータは、徐々にチャペルでの定期的な企画になっていき、バッハ・コレギウム・コウベと名付けた器楽アンサンブルと松蔭室内合唱団が、チャペルコンサートの主役となりました。しかし、同時に松蔭女子学院大学の聖歌隊も重要な役目を担ったことを忘れてはなりません。聖歌隊は決して大規模なものではありませんでしたが、とても美しい声の集まりで、当時は妻の鈴木環が毎週の指導をし、その頃のメンバーとは今も交流が絶えていません。特に、クリスマスのチャリティーコンサートは、聖歌隊の存在なくしては考えられない重要な音楽表現の場でした。



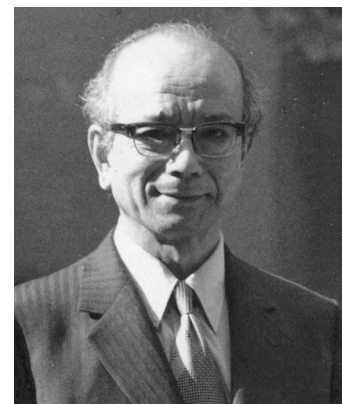
《平島先生急逝》

初期のチャペルコンサートは、すべてが平島先生のポケットマネーでまかなわれていましたが、オルガンが完成してからは、すぐに大学が援助してくださるようになり、公的なものになっていきました。当時学長の友枝先生は、オーディオにかけては右に出るもののいない専門家でしたし、音楽についてもとても詳しく興味をお持ちでしたから、私の意図をすぐに理解してくださり、大いに励ましてくださいました。

友枝先生を中心とする理事会の配慮で、まずチャペル・オルガニストというポストを作っていたいただき、上野静江さんがそのオルガニストとして、今にいたるまで学生の世話だけでなく、オルガンについてのすべてのケアをしてくださっています。

また宗教センターにも、コンサート関係の手伝いをいただくための非常勤職員を採用していただきました。初代は、畑間さんという女性で、オランダの日本大使館で仕事をされていたとき、我が家の家庭集会を経て、デュッセルドルフ日本人教会で洗礼を受けられた方でした。そののち数人を経て、現在の緋田君が助けてくれるようになり、やがて専任の職員として現在にいたっていることはご存じの通りです。そしてますます、宗教センターはチャペルコンサートの中心地になっていき、同時に聖歌隊やオルガンを学ぶ学生の、とても居心地のよいたまり場にもなっていました。初代の宗教主事でありした八代祥吉先生が「鈴木君が来るまでは、ここは天国のように静かやったんやけどなあ……」といつも仰っていましたので、申し訳なく思いつつも、チャペルを巡る活動はどんどん発展していきました。

オルガンの完成後、平島先生はもっぱら古典調律の研究に専念され、「ゼロ・ビートの復活」という調律の歴



平島達司先生

史についての名著も出版されましたが、1986年3月、突然危篤状態に陥られ、亡くなられました。突然のことで私たちは本当に驚きましたが、このチャペルとオルガンが立派に完成していたので、未だに、何か先生はいつもそこにいらっしゃるかのような思いにとらわれてしまします。聖ミカエル教会でのお葬式ののち、このチャペルでも、先生が最も愛されていたフランスのティエルス・アン・ターユ（レジストレーションの名称）とJ.S.バッハの追悼カンタータ「神の時は、いと善き時」を演奏して、追悼コンサートといたしました。



《多くの音楽家、来たる》

その同じ年には、同窓会の千と勢会からチェンバロをご寄附頂きました。これは、オランダのヴェレム・クルスベルヘンというビルダーによって製作されたもので、ソロモンの神殿と同じ、レパノンの糸杉でできています。美しいイタリア式のチェンバロで、蓋の内側には大場寿子さんによって、尾形光琳の孔雀の屏風絵が模写されました。孔雀は、栄光と同時に虚栄の象徴であり、音楽の目的を過たないことを目指しています。

オルガンのコンサートについては、1988年第1回の武蔵野オルガンコンクールの審査員として来日したピート・ケーとミハエル・ラドゥレスクが相次いで演奏してくれたことは忘れられない思い出です。

ピート・ケーは、オランダ・ハーレム市の市専属オルガニストとして、全ヨーロッパで活躍し、また作曲家としても名高いひとです。オランダ時代の私の師匠でもありました。とても繊細な、また研ぎ澄まされた感覚を持った人で、松蔭のオルガンを高く評価し、その長い指で一音一音をいとおしむように美しいスウェーリンクやJ.S.バッハを演奏してくれました。

一方ラドゥレスクは、ウィーン音楽大学の教授であり、恐るべき知性と国際性をもち、そしてユーモアたっぷりの人柄です。ドイツ語が母国語ですが、英語、フランス語、イタリア語をあたかも自分の言葉のように流暢に話し、学者としても多くの成果を挙げています。演奏は、内面的な強い意志と厳格な構成員で、ゆるぎない様式を持っています。つい先月



ヴェレム・クルスベルヘン製作 イタリアン・チェンバロ

ライブツィヒでも一緒に審査員をしましたが、当時とんなら変わらないエネルギーには圧倒されるばかりでした。

またマリー＝クレール・アランが「フーガの技法」全曲という恐るべきレパートリーを、何の困難もなくいとも易々と演奏してくれた時には、度肝を抜かれました。またトン・コープマンはお披露目以来何度か登場してくれています。もっぱらピアニスト兼指揮者とし

て活躍して滅多にオルガンは演奏しないジョス・ファン・インマゼールが、オルガンリサイタルをしてくれたこともありました。

オルガニスト以外にも、このチャペルには多くの音楽家が登場していますが、初期のチャペルコンサートで特筆すべきは、ソプラノのエマ・カークビーでしょう。聖壇の前に小さな雛壇をおいて、ご主人のリュート奏者のアントニー・ルーリーと共に、本当に息をのむような劇的な演奏をしてくれました。どうしてもスキヤキを食べたい、というので、急遽我が家でスキヤキを御馳走したことも忘れられません。

これらの世界的な規模で仕事をする多くの音楽家たちは、もちろんエージェントを通して来日するわけですから、通常ならばわずかな予算で公演を持つことは不可能です。しかし、ただひとえに、このチャペルの音響のすばらしさとオルガンの品質の高さのゆえに、これらの人々が喜んでこのチャペルを訪れてくれたことには、本当に感謝しています。

日本人では、現在のBCJのコンサートマスターの若松夏美や鈴木秀美が既に最初期から登場していますし、パーゼルのリュート奏者今村泰典やガンバの平尾雅子、またフルートの有田正広など枚挙に暇がありません。



《BCJ誕生》

さて、1990年4月に、大阪・いずみホールが完成し、お披露目コンサートが行われました。当初私は、音楽監督の礒山雅先生からオルガンコンサートの依頼を受けたのですが、打ち合わせのためにバッハの音楽についてお話しているうちに、双方徐々に興奮し、話がどんどん大きくなって、カンタータとマニフィカトを演奏してほしい、ということになったのです。そこで、松蔭室内合唱団と東京芸術大学の学生アンサンブルを合同して、お披露目コンサートに出演しようと考えたところ「至急、名前をつけてください」という電話をいただき、「バッハ・コレギウム・ジャパン」 BACH Collegium JAPAN という団体が出現しました。（コレギウムということばは、英語のcolleague（＝仲間、同僚）にあたるラテン語ですが、「コレギウム・ムジクム」（＝音楽の同僚たち）という名前のオーケストラをJ.S.バッハ自身が率いていたことから、バッハの演奏団体がよく用いる単語ではあります。そして、実はBCJの頭文字が、ラテン語アルファベットの第2、3、9番めにあたり、BACHと同じく合計が14になるので、この名前は非常に気に入っているのです。）

いずみホールのお披露目の後しばらくの準備期間をおいて、92年の4月からいよいよ新たな定期演奏会が始まりました。松蔭のチャペルと東京のカザルスホールで同じ内容を2回ずつ演奏することにしたのです。その名前のとおり、J.S.バッハのカンタータを中心としたプログラムを作り、松蔭ではもちろんその間にオルガンや他のアンサンブルのコンサートも企画しました。この頃、現在カンタータ演奏で定期的に来日してくれているペーター・コーイの

師匠にあたるマックス・ファン・エグモントや、ミュンヘンのミハエル・ショッパーなども神戸松蔭チャペルコンサートに出演してくれたことが思い出されます。



《録音開始》

さて、チャペルは1995年1月の震災にも耐え、幸運にもオルガンもわずかな傷を負っただけでしたので、3月には、神戸市内で生き残った数少ない演奏会場としてチャリティーコンサートを開催することができました。

その頃から、スウェーデンのレコード会社BISの社長ロベルト・フォン・バールと連絡を取るようになり、いよいよ7月に初めてのカンタータ録音を実験的に試みるようになったのです。J.S.バッハの最初期のカンタータを3曲だけ取り上げ、この録音セッションがうまく進み、編集してよい結果が出るならば、これからのシリーズを続けて行こう、という約束になっていました。

社長のロベルトは驚くばかりの日本通で、自分の子供たちを日本に送り日本語を学ばせたばかりではなく、自宅に巨大なモニターを置いて、衛星放送の相撲を毎日見ている人なのです。日本人の音楽家との共同作業も数多く行っていたので、私たちの活動にも興味は持ってくれたのですが、J.S.バッハの宗教音楽という、ヨーロッパ人にとっても、最も本質的なレパートリーが、果たして日本人の演奏で受け入れられるのかどうか、ということが大きな賭けであったと思います。

第1回の録音セッションは、我々がお互い思ったことをすべて話す約束になっていたのですが、ほとんど喧嘩ごしの議論づくしになってしまいました。3日間連続で夜中に録音し、楽譜の読み方から音楽作りの方法に至るまで、どんなに些細なことも議論したので、私はもう疲れ果て、これはもうダメだと思ったのです。しかし、実はロベルトは大変に興味を持っており、その録音はただちに「カンタータ全曲シリーズ第1巻」としてリリースされました。第2巻、第3巻とリリースされるうちに、徐々に各音楽関係の雑誌になどにも取り上げられるようになりました。

「日本人が、バッハを?なぜ?」というヨーロッパ人の反応には、こちらが驚いてしまい、日本でバッハがどんなに有名な存在かを、毎回説明しなければならない羽目に陥りました。が、その後の反応は連鎖的に各国に広まっていき、私たちのCDがいつもこのチャペルで録音されていることは、各国の音楽関係者の間でもよく知られています。95年からは、録音のためにソリストやメンバーを揃えるようになってきましたので、毎回のようにはペーター・コーイ、ゲルト・テュルク、ロビン・ブレイズと言ったソリストたちが訪れ、合唱も一緒に歌い、かつ松蔭会館に宿泊しながら録音が続いています。当初のように夜中ではなく、今では昼間にも録音できることがわかりました。雨や雷、またセミの声に中断せざるを得ないことも

しばしばですが、それもまたよい思い出です。

私たちの録音は声楽家を中心であることが多いので、いつも多少余裕を持った日程を立てるように心掛けています。その際、通常のコンサートホールのように、チャペルには細かい時間制限がないことで、私たちの録音の品質が保証されている、と言っても過言ではありません。よい録音を作ることは心の余裕が必要ですので、本当にこれは感謝すべきことです。また、もちろん、材料を厳選した緋田君の手料理が音楽家を奮い立たせているのも、知られざる事実で、彼の手料理なくてはBCJの録音は成立しないのです。



《新たなページ》

さて、1995年以来すでに50枚を超えるCDがこのチャペルで録音され、全世界に羽ばたいていますが、神戸松蔭とBCJとの関係は、稀有な関係だと思っています。BCJはこのチャペルで生まれ育って、世界に出ていくことになったので、私は神戸松蔭こそが我が家であると思ってきましたが、今まで両者の関係を公に言い表したことはありませんでした。ですから、このたびチャペルコンサートの第200回を、このような形で記念することができたのは、大きな感謝であるとともに、新たな関係の始まりだと思っています。

今チャペルコンサートは、宗教センターと綿密な連絡を取りながら、バッハ・コレギウム・ジャパンの事務局が請け負う形で企画されています。宗教センターは、かつて八代祥吉先生がぼやかれたように、もはやコンサートのマネジメントに翻弄されることなく、チャペルを取り巻く本来の学生などの活動に専念し、多くの新しいアイデアが生まれているように思います。

私たちBCJは、ますますヨーロッパ各地への演奏旅行が増えていますが、そのような場で得た新鮮な感動をもって、再び神戸松蔭のお客様によりよい演奏を届け、それによってJ.S.バッハをはじめとする無限の音楽的遺産を次の世代に伝えたいと思っています。そして、チャペルコンサートの充実が、大学全体の充実と相まって新たな未来を築くことができるように願ってやみません。

神戸松蔭女子学院大学とそのチャペルが、私たちに与えてくださる無限の喜びに、心から感謝をもって……。

神戸松蔭女子学院大学客員教授
バッハ・コレギウム・ジャパン音楽監督
鈴木雅明

Kobe Shoin and the Bach Collegium Japan

History

Kobe Shoin Women's University is a mission school founded in Kobe more than 110 years ago. With its Anglican background, it has a strong tradition in the understanding and teaching of musical culture, and has held numerous charity concerts with renowned performers since the beginning of the 20th century. It has also contributed to the musical culture of Kobe by starting, immediately after the war, annual performances of the Messiah at Syuraku-kan Hall.

Chapel, Organ, and Prof. Hirashima

In 1981, the previously separate campuses of Kobe Shoin, the university campus at Tarumi and the junior college campus at Aotani, were integrated and relocated to the current Rokko campus. The center piece of the new campus is the chapel, which serves as the symbol of Shoin Academy. The chapel was built with a special acoustic design intended to accommodate a new pipe organ. This design succeeded in reproducing the sound of European churches.

The key person responsible for the acoustics of the chapel and the installation of the organ was the late Prof. Tatsuji Hirashima. Though his original background was in chemistry, his later life was dedicated to the study of acoustics and instrumental tuning. The primary result of his research is the acoustics of the chapel and the installation of the organ.

The First Chapel Concert

The first chapel concert was held in October, 1981. At first, the concerts offered opportunities for musicians sympathetic to Prof. Hirashima's theories of acoustics and tuning to gather and practice. After the installation of a French classical organ built by Marc Garnier in 1983, a new series of concerts with internationally known performers began.

Succession by Masaaki Suzuki and Further Development

After the sudden death of Prof. Hirashima in 1986, the planning and organization of the chapel concerts was taken over by Masaaki Suzuki, at that time a lecturer at the university. Not only did he invite world-famous performers, he himself played the organ and the harpsichord, and formed a choir and conducted it. It was this ensemble, originally formed for the chapel concerts, that later evolved into the Bach Collegium Japan, and first performed as such in 1990 at the occasion of the opening of Izumi Hall in Osaka. A group of performers specialized in music from the

baroque period, the Collegium is comprised of people from not only Japan but from all over the world. The Collegium has started a series of performing all of Johan Sebastian Bach's church cantatas. This may well be considered Prof. Suzuki's lifework.

Recording CDs

In May 1995, shortly after the Hanshin-Awaji Earthquake, the president of BIS, a Swedish classical recording company, visited Japan upon listening to a tape of a performance by the Bach Collegium Japan. He attended a chapel concert and quickly decided to record all of Johann Sebastian Bach's church cantatas. Recordings were to be done at the chapel concurrently with the chapel concerts, and issued on CD produced and sold by BIS. It is a formidable enterprise to perform and record all of the approximately 200 church cantatas in the order of composition. The final result is expected to be a set of more than 60 CDs. The project is still ongoing.

Reaching the World

The CDs recorded in the chapel are sold worldwide and both the performances of the Bach Collegium Japan and the acoustics of the chapel have become widely known. The CDs recorded in the chapel now number over 60, including other works by Johann Sebastian Bach as well as other composers. The CDs have a high reputation all over the world. Not only are the performances themselves regarded highly, but also the chapel has achieved renown among artists for its beautiful inspiring acoustics. With the high praise awarded the CDs, the Bach Collegium Japan has established itself as one of the leading performing groups of Bach, not only in Japan but also in Europe and America.

The performance of all of Johann Sebastian Bach's church cantatas by the Bach Collegium Japan is still in progress. The 200th Kobe Shoin chapel concert was held on July 26th.

鈴木 雅明 Masaaki Suzuki



©Marco Borggreve

●プロフィール

神戸出身。12歳から教会のオルガニストを勤める。東京芸術大学作曲科に進んでからは矢代秋雄に師事。卒業後同大学院オルガン科では広野嗣雄に師事、鍋島元子主宰する古楽研究会でチェンバロを学ぶ。1979年アムステルダム・スウェーリンク音楽院に進み、チェンバロをトン・コープマンに、オルガンをピート・ケーについて学び、チェンバロとオルガンのソリスト・ディプロマを得て同学院を卒業。

80年ブリュージュ国際チェンバロ・コンクール(通奏低音部門)第2位、82年同オルガン・コンクール第3位入賞。その後、デュイスブルク音楽大学(ドイツ)講師、松蔭女子学院大学助教授を経て、東京芸術大学でオルガンとチェンバロの指導にあたる。

チェンバロとオルガンのソリストとして国内外で活躍する一方、90年からはオリジナル楽器アンサンブルと合唱団「バッハ・コレギウム・ジャパン」(BCJ)を結成し『J.S. バッハ：教会カンタータ全曲シリーズ』をスタート、音楽監督・指揮者としてバッハ演奏の第一人者として日本のみならず世界各地で幅広い活動を続ける。

BCJと、またソリストとしてほぼ毎年海外での公演を続け、2006年3月にはBCJと2度目のアメリカ公演(楽器アンサンブル、チェンバロ・リサイタル)を行ない、チェンバロ奏者としても高い評価を受ける。

オルガン、チェンバロのソロリサイタルやBCJの活動に加え近年は海外からの招

待も多く、これまでにアカデミー・オブ・エンシェント・ミュージック(AAM)、オランダ・バッハ協会(NBS)、シアトル交響楽団との共演や、07年6月イギリス・オールドバラ音楽祭などに出演。07年秋にはAAMへの再演の他、コレギウム・

ヴォカーレ・ゲント&フライブルク・バロック・オーケストラとの初共演など、指揮者としての活躍の場もますます広がっている。

レコーディングも多く、バッハ・コレギウム・ジャパンを指揮して『バッハ：教会カンタータ全曲シリーズ』(1995年〜)を始めスウェーデンBIS(ビス)レーベルより既に50枚以上のCDをリリース、急速にその評価を高めている。またオルガン・チェンバロ奏者としても『ブクステフーデ：オルガン名曲集』『バッハ：オルガン名曲集』(キング)、またスウェーデンBISよりバッハのチェンバロ作品全曲の依頼を受け、すでに『バッハ：平均律クラヴィーア曲集第1巻』『ゴルトベルク変奏曲』『インヴェンションとシンフォニア』『ファンタジアとフーガ』『フランス組曲』『イタリア協奏曲』をリリースしている。

1999年、モービル音楽賞(洋楽部門)、第23回井植文化賞(文化芸術部門)、2000年度音楽之友社賞、2001年第42回毎日芸術賞受賞。また、2001年ドイツ連邦共和国より『ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章』受章。2003年辻莊一・三浦アンナ記念学術奨励金受賞。現在、東京芸術大学教授、神戸松蔭女子学院大学客員教授。

「神戸松蔭チャペルコンサート」200回によせて



皆川 達夫 Minagawa Tatsuo

(立教大学名誉教授、音楽学)

「神戸松蔭チャペルコンサート」200回の快挙を、心よりお慶び申し上げます。その全曲目表を拝見して、とりわけ「バッハ・コレギウム・ジャパン」の圧倒的な活躍ぶりに驚嘆いたしました。鈴木雅明先生音楽監督の「バッハ・コレギウム・ジャパン」は今や世界に冠たる演奏団体ですが、それが東京でなく神戸、しかも神戸松蔭女子学院大学チャペルを原点にしていることを確認し、ただただ感嘆するばかりであります。

わたくしは東京サントリーホールで何回か解説役として鈴木先生および「バッハ・コレギウム・ジャパン」とご一緒し、文字通り生の演奏をもっとも身近に拝聴する感動を体験しております。さらに「神戸松蔭チャペルコンサート」にも参加させていただきました。

と、そこまではよかったのですが、いささか調子にのりすぎて、「いやー、“神戸松蔭チャペルコンサート”の企画は実に素晴らしいですね。さすが神戸のなさることは洒落ています。昔から“シャレコウベ”と言いますからね……」などと下らない失言をして、大学関係者のみならず全聴衆の顰蹙を買ったものでした。その失言の本人に今回の記念誌寄稿の栄をいただき、ただただご寛容のほどに恐惶感激いたしております。

この世の中、勢いにまかせて瞠目にあたいする企画を果たす事例は多数ありますが、その偉業を長続きさせ持続させる例は希少です。もろもろの困難など事情もあろうかとは推察いたしますが、「神戸松蔭チャペルコンサート」が是非とも末永く持続されるようお願い祈ってやみません。この企画はひとり神戸松蔭女子学院大学のみならず、日本の、いや、全世界の文化にかかわる貴重で重要な意味をもつ事業であるからであります。

チャペルのフランス古典様式の大オルガン



マルク・ガルニエ

Marc Garnier

(オルガン・ビルダー、
フランス・オルガン建造家協会名誉会長)

このたび神戸松蔭女子学院大学のチャペルで、記念すべき第200回コンサートが開かれましたのを機会に、チャペルに設置されていますオルガンについて、その創設の歴史を今一度思い起こす必要があるだろうと思われます。

チャペルにパイプオルガンを設置することを提唱されましたのは、今は亡き平島達司先生です。キリスト教を信奉する大学がオルガンを設置することは、それ自体ふつうに見られることです。しかし、松蔭のオルガン設置の願いにはそれ以上の思いがこめられていました。といいますのも、この計画の標的は明確に定められていたからです。つまり、17-18世紀のフランス様式のオルガンを再現することにありました。日本のパイプオルガン建造の世界では、まさに

画期的なことと言えましょう。といいますのは、初めて通常のオルガン建造がたどる道から外れることになるからです。ふつうは、ひとつのオルガンでいろんな作曲家のいろんな作品を最大限演奏できることが望ましいのです。たしかにそれはもっともな願いではありますが、音楽の世界で受け継がれてきたものの復元やその音楽性という領域においては、ひとつのオルガンに様々な様式を合成することにより、思いがけない遺憾なことがいろいろと起こりうるのです。そのため平島先生が特に望まれたのは、その当時使われていた調律法の再現でありました。

調律法とは1オクターヴを12の半音に分割する仕方であります。19世紀半ば以降に使われるようになりましたいわゆる12に等分する平均律は、今日でもなお近代音楽で通常使われている調律法の地位を失ってはいません。しかし、各時代には、特に好まれていたひとつあるいは数種の調律法があり、それらの調律法に基き、豊かな旋律、色彩豊かなハーモニーを開発しつつ音楽が書かれることになります。そうした旋律やハーモニーの創造者はそれらをこそ前面に押し出そうとしたのです。

ある種の調律法は3度の音程の協和を優先させようとしたし、他方、過去には、この音程を不協和とみなし、そのかわりに5度の音程を優先させようとした調律法もありました。1オクターヴのなかをどのような音程で分割するのかをめぐってさまざまな試みが長く繰り広げられてきましたが、新たな調律法が生まれるたびに、新たな音色が生まれ、作曲家たちはその音色のもつ豊かさをできるかぎり開発しようと、嬉々としてそれに専念することになるのです。

こうして、例えば、純正な音程を持つ調律

法は、フランス古典音楽のフレーズに、ある独特な色彩や独特なメロディー進行を授けることになります。それらを現在の平均律で再現することは不可能なのです。平島達司先生は、当時の調律法を尊重することが、グリニー、マルシャン、クレランボー、ボワヴァンその他、その当時の作曲家たちの音楽を演奏する際に、最良の支えを提供することになるだろうということを、よく理解されていたように思われます。

おそらくここで思い起こすべきなのは、オルガンは1500年代から建造されてきたということです。キリスト教の歴史の中で、ヨーロッパの各地方、各世代において、あるタイプのオルガンが開花することになり、作曲家たちはそうしたオルガンを創造の道具として、自分たちの音楽作品を生み出してきたのです。この問題をもっと近くから考察するなら、18世紀の中央ドイツのオルガンのために作曲されたJ.S.バッハの曲を、もし19世紀のイタリアのオルガンで演奏すれば、その性質は大いに歪められることになるだろうということに人は気づくでしょう。

その当時のフランス音楽をドイツのオルガンで再現しようとするときも同じことが起こるのです。平島先生はこのことをよく理解されていました。その時代の典型的なフランスオルガンを建造するという賭けにはリスクもありましたが、結果はおそらく成功であったように思われます。といいますのは、今日、このオルガンは、日本のパイプオルガンの世界において、今なお特別な地位を占めているからです。

では、その秘密を解く鍵はどこにあるのでしょうか。

実のところ、それはとても簡単なことです。私たちまで受け継がれてきましたこの多くの音楽作品を再現し、演奏するという仕事に当

たらねばならないとき、人は真正さに配慮して、それに適った道具を備えなければなりませんし、自らの楽器についての知識や音楽理論の知識をたえず世に発信しなければならないのです。

平島先生は、自ら行いました研究(そのいくつかの著書がそれを立証しております)に導かれて、残響の復元に取り組まれました。それは演奏される場の音響の如何に左右されます。その結果、今あるようなチャペルのあの豊潤な音響効果が生まれたのです。こうして、定まった型式のオルガン、歴史のなかに占めるひとつの時代、調律法、音響と、すべての道具立てがそろいました。あとはそれらを現実のものにする者を見つけるだけでよかったのです。この計画を実現するに当たって、このような資質と品質をそなえた前提条件に恵まれたことは、私たちにとって望外の幸運でした。

最後に付け加えるべきことは、こうした活動の当初から、神戸松蔭女子学院大学には幸運にも鈴木雅明というすぐれた資質をそなえた音楽監督がいたということです。鈴木氏は松蔭で行われる音楽活動に生命を吹き込まれました。その能力と成果についてはもはや取り立てて申すまでもないでしょう。

女性、男性を問わず昔から人間の生活の重要な原動力である文化というものを重視する神戸松蔭女子学院大学に、私は繰り返し賛辞を呈したいと思います。

このオルガンが国境を越えて、限りなく音楽に奉仕せんことを祈りつつ。

MUSICAM SINE FINIBVS HOC ORGANUM
FOVEAT

訳：木谷吉克
(神戸松蔭女子学院大学教授、フランス文学)

神戸松蔭のチャペルとステインドグラス

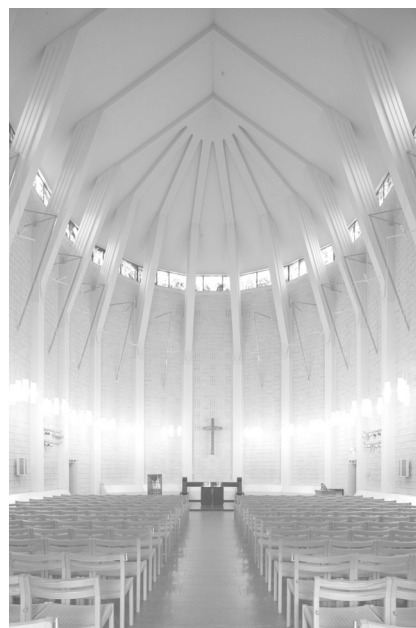


立花 江津子
Tachibana Etsuko

(ステインドグラス作家)

神戸松蔭のチャペルコンサートが200回記念を迎えられたと伺い、チャペル建設の時から関わらせて頂いた者として、完成までの様々なシーンを想起すると共に、その空間に音楽の豊かな恵みと感動の歴史が刻まれてきた事に深い感慨を覚えております。又、この歴史ある大学で、チャペルのステインドグラスの制作をさせて頂きました時のことを、今も懐かしく鮮明に記憶しております。松蔭のチャペルのステインドグラスは、私の作家生活の中でも特別の意味を持つ作品となりました。

制作のご依頼を受けましたのは、1980年の早春でした。その当時の先生方(友枝学長、荒井先生、棚橋先生)と制作に当たってお話し合いを重ね、タイトルは「聖書物語」とし、その膨大な物語の中から限られたテーマを取り出すことの困難さを克服し、選ばれたのは「光と闇」「秩序と混沌」「救済と墮落」でした。テーマに相応しい物語を選ぶこと、制作に関わる一切は作家の手に委ねられました。問題はステインドグラスの形態としては前例を見ない43.5メートルという横長の空間、パイプオルガンとのせめぎ合いの中で地上9メートルとなった高さ、建築家のデザインとして松蔭新学舎の他の部分でも取り入れられていた楕円形の空間(南面―パイプオルガン上部)でした。しかし、これらの問題はデザインを進める作業の中で、まるでパズルが解けるように解決してゆきました。教会建築の構造の中で、ステインドグラスが聖書の物語を表現する手法は下から上へ、上から下へというのが通常でしたが、松蔭のチャペルは世界のチャペルの中でもあまり例を見ない、異例の表現手法として日本の絵巻物のように物語を横に繋げてゆく。高さは下から仰ぎ見ても物語が理解できるように、形をシンプルに表現する。そして



チャペル上部のステインドグラス

南面の楕円形は、私がベルギー留学時下宿の前にあって、芸術作品でありながら人々の信仰の対象となっている聖バーフス大聖堂の「神秘の子羊」(ヴァン・エイク作)のように、松蔭の「神秘の子羊」を作る。ということで解決できました。(参照:表紙裏)

東の窓は旧約「光あれ」から始まり光り、秩序、救済の物語。西の窓は旧訳「エデンの園」から始まり、闇、混沌、墮落の物語を描く。東の窓と西の窓は、やがて新訳につながって北面の復活のイエス・キリストで交わる。このような基本構想が出来た後は、あぶり出しの絵のように聖書の中から物語が浮かび上がって来、これらが造形としての線と色の流れの中に配置され、聖書の物語の中の人や動物が生き生きと中心(北面)に向かって歩み始めました。様々な準備(聖書の読み解き―時代考証―緻密なデッサン―これらを一度白紙に戻して、作家のオリジナルなイメージの世界を構築する―これを基に下絵を起こす)に5ヶ月、実質的な制作に7ヶ月、トータル1年という短い制作期間は精神的にも物理的にも大変ハードなものでした。しかし祈るという一番素朴で力強い味方に助けられ、ついに完成の日を迎えました。チャペルでのほめ込みは、普通は窓の周りにのみ回廊の様に足場が組まれるのですが、このときは何と地上9メートルの高所に全面足場が組まれ、高所恐怖症の私も、たぶん一緒に上がられた先生方も(?)高所であることをあまり気にすること無く、はめ込みを見守ることが出来ました。1981年3月のことでした。



チャペル正面「復活のイエス・キリスト」

チャペルの作品は私にとって特別なものになりましたが、さらにこのチャペルが私にとって生涯忘れられない特別な場所となる出来事がありました。私事で恐縮ですが、後年このチャペルにおいて前田先生の司式で挙式させて頂き、心に深く残る懐かしい人生の1頁が刻まれました。そのときに松蔭の学生さんがソロで歌って下さった「アヴェ・マリア」(J.S.バッハ/グノー)の美しい歌声は今も清らかな響きをもって耳に残っております。

チャペルコンサートはこれからも回を重ね、さらに多くの人々が音楽の喜びと感動を享受されることでしょう。紡ぎ出される極上の音楽とステインドグラスの光が相まって松蔭のチャペルだけが生み出すハーモニーの中に身を置いてみたい、今そんな思いがしております。神戸松蔭のチャペルコンサート、ますますのご発展をお祈り申し上げます。

チャペルの音響設計

松本 敏郎

Matsumoto Toshiro

(竹中工務店)

チャペルとオルガンの響きへの想い

このチャペルとオルガンの構想においては、故平島達司教授の18世紀パイプオルガンの響きを再現したいとの熱意を抜きに語することは出来ません。故平島教授は、チャペル計画に先駆けパイプオルガンの響きに関する本格的調査研究をすすめて、「あたかも天から降り注ぐごとく豊かな美しい響きを持っているのは、1700年～1750年に建造されたものである」との結論を得られています。これらの数多くの有益な研究成果は、著書「オルガンの歴史とその原理」「ゼロビートの再発見」日本オルガン研究会機関紙「オルガン研究」などに発表されています。

当チャペルのオルガン導入にあたっては、これらの研究成果をもとに、下記三つの条件が設定されました。

- ・ヨーロッパの石造りの聖堂で経験した歌声やオルガンの響きが天から降ってくるような会堂を建てること
- ・そこに設置するオルガンは、威圧的な響きを持つタイプのものでなく、柔らかく多彩な音色変化が可能なフランスオルガンに範を求めること

- ・調律も現代の等分平均律によらず、1700～1750年代の透明感、緊張感、よいハーモニーをもつ古典調律法によること

これらにより女子学生たちが礼拝で歌うのを助けオルガンソロの場合にも神を賛美し、あるいは静かに神を想うのにふさわしいものになると考えられました

オルガンビルダーを求めて

この条件を満足させるものとしてフランス・クラシック・オルガン(1700～1750年代のもの)が選ばれ、これらにふさわしいオルガンビルダーとして、平島教授はフランスの若きオルガン建造家マルク・ガルニエ氏(現フランスオルガン建造家協会名誉会長)を見いだされました。このあとマルク・ガルニエ氏は、このチャペルのオルガン建造で高い評価を得、東京芸術劇場、聖路加病院聖ルカ礼拝堂、東京芸大奏楽堂を始めとした数多くのパイプオルガン建造を行うなど、活躍は皆様ご存じの通りです。

チャペルの音響設計

18世紀のフランス・クラシック・オルガンの響きを再現するチャペルの音響設計に関して、我々は全く無知であり、ヨーロッパの教会に出向き、オルガンの音を聴き、音響工学的観点から教会堂の規模、形状、室内仕上げ、残響時間を実測調査することから着手しています。調査した教会はフランスをはじめ、イタリア、西ドイツ、東ドイツ、オランダの約90の教会にわたっています。実際にヨーロッパの教会に行ってみると、わが国の教会堂とは全く異なる音響であり、この音響を再現するにはわが国でこれまで慣用されてきた指針とは異なる音響設計を行わなければならないことが明らかになりました。

これらの貴重なヨーロッパ教会の調査結果をもとに平島教授、マルク・ガルニエ氏、竹中技術研究所音響チームによる度重なる検討が行われ、チャペル1/20模型による種々の音響実験、内装材に関する音響実験等の検証結果を踏まえ、チャペルの設計が進められました。

チャペルの形状は、パイプオルガンの音が天から降り注ぐよう反射音の流れをコントロールするとともに、内装仕上げにより、残響の長さ、周波数特性を最適なものにしよう設計されています。以下にその概要を紹介します。

チャペルの形、オルガンの位置、天井高さ

オルガンの音が天から降り注ぐようオルガン位置を高さ4m、天井高さ16.5m(全体の音のバランスを保つため、当初設計から5m高く

なるよう変更)とし、天井で拡散された音が適度な時間遅れで聴衆に到来するよう配慮されています。

チャペルのタテ・ヨコ・タカサビ

オルガンは非常に低い低音から高音までの広い音域の音を発生します。会堂の寸法比が整数倍になると特定の低い周波数の音が大きくなりこもった音となり不快で好ましくない音響状態になります。当チャペルでは、これらの整数比を崩し、幅約12m、奥行き約25m、高さ約16.5mとし、室内で低音の共鳴が生じないための工夫がなされています。

切り妻形の木天井

天井は切妻形状とすることで、オルガンからの反射音を拡散させるきっかけを与えてい

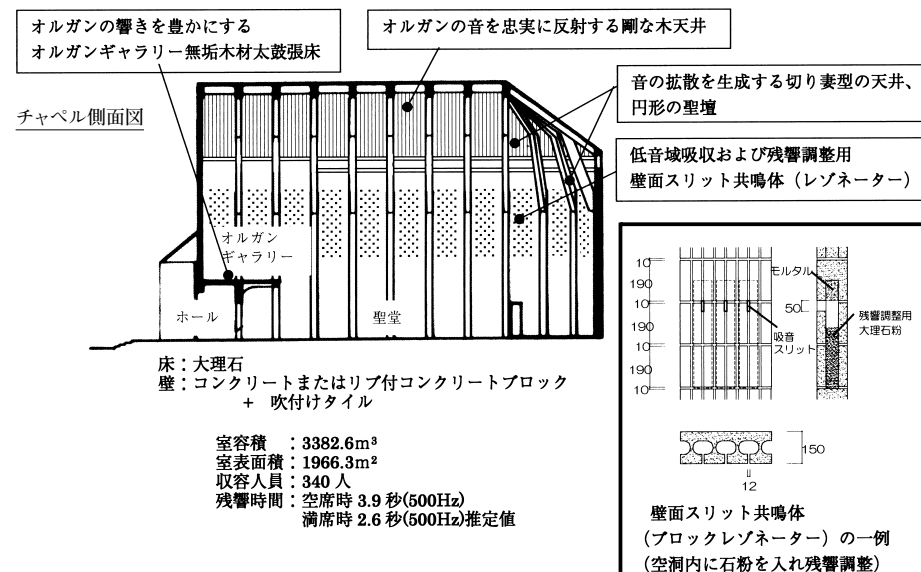


図-1 松蔭チャペルの主な音響仕様

ます。また、在来の天井より下地ピッチを細かく補強し、総厚30mmの木天井にし、剛な反射面としてパイプオルガンの音を忠実に聴衆に返す工夫がなされています。

オルガンギャラリー

オルガンを最もよく響かせるにはオルガンギャラリーを木造で構築することが望ましく、オルガンギャラリーはガルニエの手によって35mmと25mmの無垢木材太鼓張り床で構築され、オルガンをこのギャラリーに乗せることでオルゴールの箱のように共鳴体としての効果を発揮しています。

チャペルの残響

ヨーロッパの教会建築では、高い天井に嵌

め込まれたステンドグラス、木部などがほどよく低音の吸収を果し音響的に最良な状態を作り出しています。調査の結果から低音域の残響特性がほぼ平坦で、低音の響きを抑えた教会は総じて響きが素晴らしく当チャペル残響設計の目標にしました。また、ガルニエ工房に近く、オルガンの響きがとても美しいモルトーの教会は、特別詳細な調査を行い残響設計の参考にしています。

残響時間の目標は空席時3.5秒以上、満席時2.5秒以上、低音域が平坦な残響特性としました。

壁面の共鳴器による残響調整

チャペル内はヨーロッパ教会に習い反射性の材料で構成されていますが、チャペル内で残響特性に大きく影響するものとして、聴衆、

パイプオルガンの吸音力があります。パイプオルガンの吸音力は人の吸音力と比較するとおおよそ50～60人分相当の吸音力があります。これらは事前の推測が難しく、パイプオルガン設置後に調整する必要があります。また、目標とした低音域の残響を抑えるため、低音域の吸音と調整可能な吸音面が必要となりました。このためチャペル壁面にはコンクリートブロックの空洞を利用したヘルムホルツ共鳴器が仕掛けられています。

パイプオルガン設置前にはチャペル内の残響時間は6秒(500Hz)パイプオルガン設置までの約2年間はチャペルの話し声の明瞭性を確保するためオルガンギャラリーにオルガン替わりの吸音トラップを設置し凌いだ時期がありました。

オルガン設置後のチャペルの残響時間は、

壁内に設けられた共鳴器のスリットから大理石の粉を調整砂として入れることにより、周波数特性を整え、最終調整後の残響時間は、3.9秒(空席時)、300人収容時2.6秒(推定)となり当初目標にした低音域が平坦な残響時間周波数特性を実現しています。このような経緯で国内においては前例のない音響特性の教会が誕生しました。

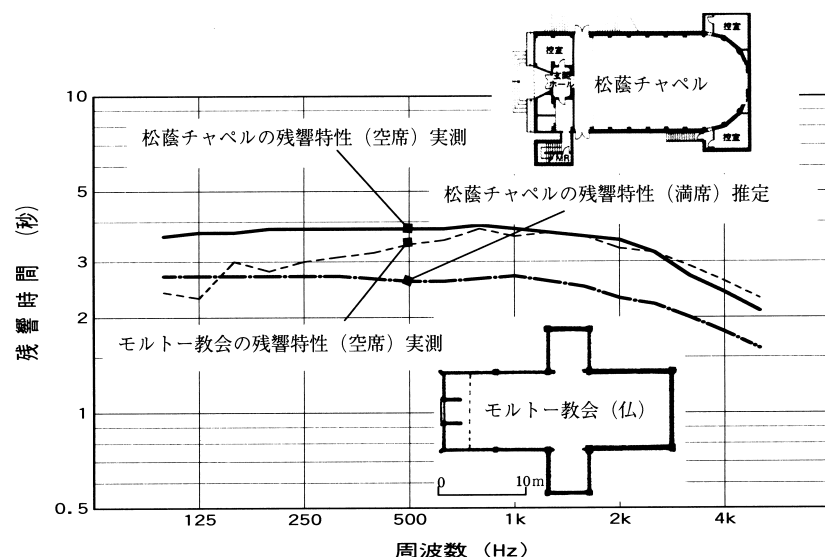


図2 松蔭チャペルとモルトー教会の残響時間周波数特性

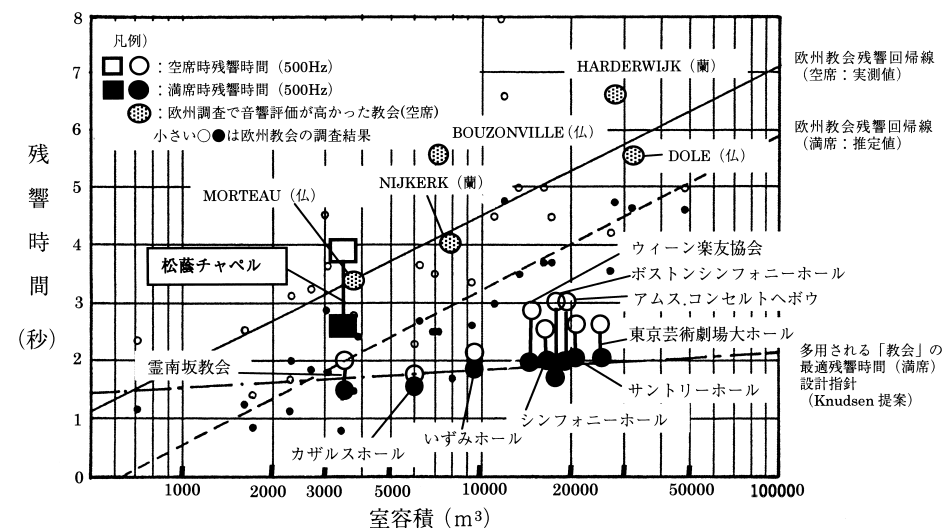


図3 松蔭チャペルと他の教会、ホールの残響時間比較

BCJの神戸松蔭チャペルでのCD録音

ロベルト・フォン・パール

Robert von Bahr

(BISレコードCEO)

BCJとBIS社がレコーディング・プロジェクトの開始に合意し、バッハの全作品の録音をベースにすると決めたのは、1995年でした。その際、大きな判断要素となったのが、私たちが神戸松蔭女子学院大学のチャペルを使わせていただけたということです。

あの悲惨な大地震から間もない神戸に居合わせ、母なる地球の計り知れない力を目の当たりにしたことは、今もまざまざと覚えています。松蔭のチャペルが被害を受けずに済んだのは、幸いでした。

チャペルの音響はバッハの音楽にはまったく理想的ですが、それ以上に、そこには大学全体、そして大学の皆様が醸し出す空気があります。松蔭という「場」とその「住人」の双方が発するポジティブな波動が、ここでの録音の一部となっているのです。その成果が高い評価を受け、BCJやKobeのShoinが世界中に知られるようになったのも当然のことといえましょう。

幸いにもそこで仕事をするのを許していただいた者の一人として、ご配慮に深く感謝し、ただ頭を垂れるのみです。

音楽のカメレオン～BISについて～

BISは1973年に設立されました。レコード・レーベルはニッチ市場を狙わなければならない、と創立者のロベルト・フォン・パールは考えました。テレマンのビリオド楽器による演奏、ニルソンが歌うシベリウス、また、生きている作曲家たちの作品……そしてリゲティやブリテン、ラウタヴァーラ……さらに、ムソルグスキーやR.シュトラウスまで……。夢幻自在な、音楽のカメレオンが誕生した瞬間でした。

親しまれている名曲を録音するのではなく、BISは音楽史上、顧みられることのなかった名曲を発掘することに力を注いできました。

30年前、ロベルト・フォン・パールは、録音機材を車に積み込み、フィンランドやデンマークにフェリーで移動し、録音をしていました。今では、シンガポールやブラジル、英国の教会、そしてバッハ・コレギウム・ジャパンの録音のために日本の神戸まで駆けつけることができます。

音楽というものは、人をとりまくものです：作曲家、演奏者、そして聴衆を。音楽というものは、性別、年齢、国籍には一切関係ありません。BISのカタログには、女性作曲家によるものも多く含まれています。音楽は、ユニバーサルな言語であり、国際的な相互理解を促進すると固く信じています。

今日、BISは、様々な人々の音楽的ニーズに応えています。古楽の分野でも確固たる地位を誇っています。その代表として、鈴木雅明氏率いるバッハ・コレギウム・ジャパンがあり、ほかに優れたアーティストの録音が多数あります。また、シベリウスをはじめ、スカンジナビアの音楽も多数録音しています。音楽界のカメレオンは、今や音楽界に潜むライオンとして、道行く人々、すなわち聴衆を驚かせる存在となっています。

チャペルコンサートがもたらしたカンタータ全曲録音

天沼 澄夫

Amanuma Sumio

(株式会社キングインターナショナル代表取締役社長)

神戸松蔭チャペルコンサートがなんと200回を数えたことをお聞きし、これは正真正銘、偉業だと思いました。この企画を推進されてきた関係者のご努力に、心より敬意を表したいと思います。欧州の名門クラシック・レーベル、BIS社のバッハのカンタータ全曲録音はここ松蔭チャペルを録音会場に、鈴木雅明さん率いるBCJと1995年にスタートしましたが、誰もがその壮大なスケールと途方も無い長期間のプロジェクトに度肝を抜かれました。すでに13年が経過していますが、まだまだ完結の途上にあります。私は忙しさにかまけて、またコンサートそのものは東京で聴けることもあり、今まで一度もチャペルに足を運んだことは無かったです。今回の200回目のコンサートでやっとこれを実現することが出来ました。そしてなぜ今まで録音の立会いに來なかったのかを後悔致しました。なぜならこのホールの音響もデザインも飛び抜けて素晴らしかったからです。それにBCJの心をえぐる、美しく、精緻な演奏ですっかり幸福感に浸りました。

BIS社とは20年来ディストリビューションを

しており、社長のロベルト・フォン・パールさんとは今では家族のような付き合いをしておりますが、これほど日本への愛情に満ち、理解をしてくれる人を知りません。日本人の技術と芸術的感性の高さのみならず、和食、畳の生活スタイル、相撲、伝統文化に至るまで、大変な日本びいきです。子供二人を日本に送り込み、日本語さえ習得させてしまいました。一人は我が家で一年間預かっていたことも今では懐かしい思い出です。彼は日本人作曲家の録音や日本人アーティストの起用を推進しておりますが、その中核が鈴木雅明さんとバッハ・コレギウム・ジャパンによる松蔭での録音なのです。

今年の1月はバッハの「ロ短調ミサ曲」のCDが、音楽の友社の主催する「レコード・アカデミー賞」の大賞・銀賞をいただくという栄誉に輝きました。また海外でも欧米の権威あるクラシック専門誌において、BIS／BCJ／松蔭チャペル・サウンドは絶賛されています。このような栄光あるプロジェクトに、レコード会社として関わった事は、私自身にも大きな誇りとするところです。

これらの原点になっているのが、このたび200回を数えた神戸松蔭チャペルコンサートにあることは言うまでもありません。これなくしてカンタータ全曲録音は不可能でした。

これからもまたこのチャペルに於いてカンタータなどの録音が続いていくわけですが、一番心配なことは、はたしてこのプロジェクトに関わる皆様方が健康を維持して、今後もお元気でいられるか、ということです。それはCDを売ることを生業にしているレコード会社の都合(がなくはありませんが)だけでなく、世のバッハ・ファン、BCJファンのかすかな心配でもあります。関係者の皆様、くれぐれもご自愛の程、よろしくお願い申し上げます。

神戸発世界へ

～バッハ・コレギウム・ジャパンとバッハの教会カンタータ～

齊藤 公治

Saito Kimiharu

(NEC社会貢献室 メセナエキスパート)

体は、いまだかつてありませんでした。しかも、そうした現象が国際的な演奏活動をとおしてではなく、CDによって推進されたこともまた、エポック・メイキング的な出来事だったと思います。

しかし、そうした期待とはうらはらに、こうした活動を継続するための経済的な問題には無関心ではいらませんでした。当時、東京ではカザルスホールでの公演が二日間連続で行われていましたが、入場者数は二日合計で5百名くらいだったと記憶しています。さらには神戸での録音と公演のための経費が非常に大きなことも知り、『この先、BCJは本当に活動を続けていけるのだろうか?』と、非常な不安を感じていたものです。

NECはBCJの支援に際して、コンサートやCD制作の支援と合わせて、古楽の普及と啓発を目的とする『NEC古楽レクチャー』を開催し、鈴木雅明さんに毎回講師をお願いしました。レクチャーの講演を活字に纏めたレポートも初回から11年間にわたって作成して希望者に配布、お渡しした方は5千名を超えました。

BCJのメンバーや事務局の方々の努力の末、BCJの国際的認知が高まるのと軌を一にして、東京でのコンサート来場者は年々増加。現在は東京オペラシティでの一日の公演に約千名の方がご来場されるに至りましたが、こうした来場者の増加に対して、NECとしてもレクチャーなどをとおして多少なりとも貢献できたのではないかと考えています。

さて、私自身は今まで何度か神戸松蔭女子学院大学のチャペルを訪れ、録音とコンサートの場に立ち合わせていただきましたが、そのたびにBCJの活動の原点を見る思いがします。

都会の雑踏から離れた、緑に囲まれたキャンパス。そして、演奏表現の細かい壁までを感興豊かに伝えるチャペルの響き。非日常を必要とするアーティストたちが数日をかけて録音とコンサートのために過ごすには、絶好のロケーションという気がします。

そしてまた、厳しいながらも和気あいあいとした録音の合間をぬって、合唱団員で大学職員の緋田さんがシェフをつとめる料理の美味さ!

冬の、六甲おろしの冷たい風に雪の混じる日のこと。録音セッションが一段落して宗教センターに引き上げてきたメンバーが卓を囲んで『これが楽しみ』とばかりに緋田さん特製の粕汁に舌鼓を打つ姿を目にし、『この共同生活での団結があるから、BCJの活動が続くのだ!』

BCJメンバーの精神的な絆の源泉をはっきり

見た思いがしました。

かつてチャペルの入口付近に1枚の看板が立っていて、『このチャペルでバッハ・コレギウム・ジャパンによるバッハの教会カンタータ全曲録音が収録され、世界にその響きを伝えている』といったことが記されているのを、静かな感動の思いとともに目にしたことも、懐かしい思い出です。

そう、まさにそのとおり。

ここ、神戸松蔭女子学院大学のチャペルは、BCJが世界に向けて発信するバッハの教会カンタータ演奏の故郷(ふるさと)といって過言ではないと思います。

神戸発世界へ。

これからも、神戸松蔭女子学院大学がBCJの音を育み、世界に向けて彼らの演奏を発信してくださることを期待して、拙筆の結びに代えさせていただきます。



©K.Miura

松蔭チャペルの光



鈴木 秀美
Suzuki Hidemi

(チェリスト／指揮者、BCJ通奏低音奏者)

あれは何年のことでしょうか…コンサート前の午後、淡白い佇まいのチャペルで、悠久の時の流れとでも言うべき組曲第6番のアルマンドを独り弾いているとき、ふと気がつくとい私は優しい黄金色の光に包まれていました。極上の絹を纏ったかのように微かに暖かく、体もチェロも現実離れた色になって、弾いている音さえ透明になってゆくような気がします。思わず涙がこぼれそうになって上を見上げると、どっしりとしたオルガンの後方にある小窓のステンドグラスがまばゆいばかりに輝き、ビームが真っ直ぐ私の方へ差し込んでいたのです…。しかしコンサートの時にはもう日は落ちて、透明だったはずの音の現実を目を向けざるを得なくなっていました。

神戸松蔭のチャペルコンサートが200回と聞き、もうそんなに時間が経ったのかと驚きます。特に古い音楽を扱う私たちは、200年前の音楽を「新しい」とさえ呼ぶのですから、四半世紀など瞬く間のできごと…それが本や楽譜の中ならばの話です。現実には20数年間コンサート・シリーズを続けていくにはどれだけの苦労や忍耐、献身があったことでしょうか。松蔭でのコンサートについて私が知っているのはごく一部分でしかありませんが、その全てを準備してこられた方々に心からの御礼を申し上げ、拍手を送りたいと思います。

「ゼロ・ビート」という名の由来は多くの方がご存知でしょうけれども、調律の世界で、二つの音がきちんと整数比になって「うなり」のないことをそう呼びます。松蔭でのコンサートが始まった頃には平島達司先生もまだお元気で、コンサートを聴きにきて下さいましたので、調弦には随分神経質になったものです。演奏の出来はともかく、どのように調弦し、どういう音律で演奏したかということ等が本に書かれてしまうのですから…。まだガット弦の

扱いにもそれほど慣れていなかったその頃、音律という知識によって、私たちの耳はようやく少しずつ啓かれていったのでした。

極めて特殊なこのチャペルのオルガンを聴けば、その堂々たる外観だけでなく、音色と全体の響き、そしてその調律が特別であることが分かります。全体が調和すること、大音響になってもなお部屋と楽器が一体となっていること、音が大きくなっても喧しく感じないこと、一人の管楽器や弦楽器、或いは人の声のように語りかけてくる音色…このオルガンを聴いて初めて感じたことはたくさんありますが、このチャペルは、「楽器」に部屋そのものが含まれることを本当に体験できる稀有な空間です。

しかしオルガンにとって素晴らしい響きは、往々にして弦・管楽器などにとってはコントロールの難しいものとなります。バッハ・コレギウム・ジャパンの録音プロジェクトが始まって以来、いったい何千時間あのチャペルで弾いたのか見当も付きませんが、いつも、最初しばらく、その響きになれるのに時間がかかるのです。その響きの中で音楽が理解されるように、演奏の仕方、発音、テンポや音色、全ては変わります。もちろんそれはどんなホールでもある程度行われる作業ですが、このチャペルに於いては特に必要な手順であり、それによって特別な音楽となるのです。響きの中にいる聴衆が解るにはどう弾けばよいか、それを近くのマイクで録ったらどうなるか…録音という、極めて皮肉な『諸刃の剣』的行為について殊更に考えさせられるのもこのチャペルです。

大きな教会とそれをとり囲む広々とした広場や通りといった場所はヨーロッパならそこかしこに見受けられますが、日本ではなかなか見られません。もちろん日本では寺や神社と

その境内、参道等であったのです。この敷地に入ってチャペルの辺りを歩くと、ふとヨーロッパのどこかへ戻ったような気分になります。学校の日常の邪魔にならぬよう、いわば特別な時間(休日や夜中など)にいたることが多いのもその気分を強める要因でしょうし、そうはいつつ多くのご迷惑もかけていることでもありましょうが…。ヨーロッパの街、と一口に言うのも大雑把な話ですが、長年住んだオランダやベルギーのみならず旅先の国々でも、歩いていると街から元気をもらうような気がすることはよくあります。反対に東京では、ただ歩いているだけで疲れる気も致します。その理由には多くの要素が絡んでいることでしょうが、学内とはいえ、このチャペルの周りにも人を元気にしてくれる雰囲気があるような気がするのです。

四季をはっきり感じられる日本では、私たちの用いる楽器に適した気候はせいぜい年に2ヶ月程度、それ以外はいつも湿気や乾燥に苦労しながら弾いていますから、少なくとも心の中はゼロ・ビートから程遠いのが現実です。しかしそれでも、このチャペルで演奏することはいつも、私たちを特別な気分させてくれます。

このチャペルのコンサートでは恐らく、数多くの「日本初」が行われたことでしょう。初めての曲、初めての楽器、初めての演奏形態…それらは繰り返されて次第に「当然」となっていくのですが、それがただ当たり前の日常的ルティーンに陥らず、毎回「初めて」の鮮度を保ちつつクオリティを高めていくのが私たち音楽家の務めです。さしあたっては目前のコンサートに最善を尽くし、次は400回記念あたりにまたご挨拶をお送り致しましょう。まだ書けるならば…。

神戸松蔭チャペルに寄せて



ペーター・コーイ

Peter Kooij

(バス、デン・ハーグ王立音楽院教授)

J. S. バッハをはじめ、いろいろな曲を歌ったものでした。いつも、久しぶりに我が家に帰ったような気がします。

それが松蔭のチャペルと何の関係があるのかと、訝っておられることでしょう……。いえ、答えはとても簡単です。松蔭のチャペルにいと、父の教会にいとるときと同じように感じるのです。初めて松蔭で歌ったのは、スーアの教会のように48年前でこそありませんが、もう13年も前になります。この13年間、親友マサアキ・スズキとともに J. S. バッハの音楽作品をたくさんレコーディングしてきましたが、そのほとんどが松蔭での録音でした。

初めて松蔭のチャペルに足を踏み入れたとき、美しいオルガンに目を見張りました。コンサートのたびにあの見事な楽器をお聴きいただけるのは、私にとっても嬉しいことです。松蔭のチャペルでのバッハのカンタータのコンサートには、大きなコンサートホールよりずっと親密な雰囲気があります。コンサートというより、教会の礼拝のようです。それこそ、バッハがこれらのカンタータを書いた目的でした。聴衆の皆様も、限られた数ですがいつもとても熱心で、演奏の質と同時に信仰にも尊敬の念をもってくださっています。

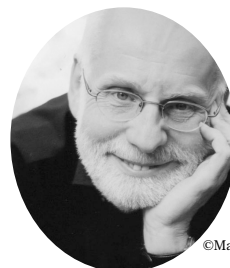
日の光が差し込んで小さな窓を燦めかせ、なんとも美しい色とりどりの光で私たちを照らす時など、バッハがちょっと覗きにきて、ここにいっしょにいるんだと想像したりします……。

これまでの人生の大半バッハを歌ってきた私にとって、松蔭のチャペルがいかに大切な場所であったか、そして今も大切か。それを、今改めて感じています。

願わくば、この全曲録音を終える機会をお与えいただけますよう、そして、これからもたくさんのコンサートをお聴きいただけますよう。

神戸松蔭女子学院のチャペルについて何か書くようにとご依頼いただいて、まず思いを馳せたのは、オランダのスーアという町にある教会のことでした。父がオルガニストと聖歌隊の指揮者を務めており、私は6歳のときからボーイソプラノとして歌いはじめた教会です。今も教会を訪ねるたびに心の扉が開いて、そこで味わった素晴らしい瞬間のあれこれがよみがえってきます。

神戸松蔭チャペルの思い出



©Marco Borggreve

トン・コープマン

Ton Koopman

(指揮／オルガン、チェンバロ)

私がはじめて松蔭に行ったのは、ガルニエオルガンのお披露目の時でした。その数年前からマルク・ガルニエとは知り合っていたので、彼がどんなふうにフランス様式の楽器を作るのか、とても興味があつたのです。松蔭のチャペルの大きく開かれた扉があたかも心から歓迎してくれているように見え、そのセンスのよいモダンなチャペルに入ると、印象的なフランス18世紀風のオルガンフロントが目に入りました。そのオルガンは、とても美しく、また微妙な色合いをもって鳴り響き、教会堂は理想的な音響を持っていました。もともと中と外の温度が違わないことに、ちょっと驚いたのですが。

何年ものち再びこのチャペルで、チェンバロと、同じくガルニエ製作のポジティブ・オルガン、そして大オルガンを弾きました。同じ楽器との再会は、たえすばらしい楽器として記憶に残っていても、「何がそんなに刺激的だったのだろうか?」とがっかりすることが多いのです。しかしここでは、マルク・ガルニエのオルガン製作のコンセプトと、私の愛弟子マサアキ・スズキの先見の明に、改めて深い印象を受けました。というのは、ヨーロッパから招聘したマルク・ガルニエが神戸松蔭女子学院大学の理想的なパートナーとなり、その後他のオルガン建造計画の先駆けとなったからです。

マルクの最も美しい楽器はいつも日本に建造され、ヨーロッパにはないことがやや残念でもあります。が、神戸松蔭女子学院大学と鈴木雅明は、20世紀後半の日本のオルガン建造に、私たちヨーロッパにいた者がうらやましくさえなるほどの大きな影響を与えることになったのです。

ともあれ、おめでとうございます!!



オルガンお披露目の演奏会 (アシスタントは鈴木雅明)

～神戸松蔭チャペルコンサート200回の歩み～

回数	開催日	内容
1	1981 11/22	《チャペルコンサート》北村 郎、ターヘ室内合奏団、若井和子 他／バッハ：ブランデンブルク協奏曲 第4番 他
2	1982 1/9	《鈴木雅明 オルガン／チェンバロ・リサイタル》ロッシ：トッカータ第7番、バッハ：半音階的幻想曲とフーガ 二短調 他
3	3/28	《スペインとイタリアのバロック音楽》中村洋彦、西村喜子、大岩みどり／オルティス：リチェルカータ 他
4	4/25	《復活祭のためのカンタータとアリア》合田 清、岡本一郎、中村洋彦 他／バッハ：カンタータ BWV 160 他
5	5/9	《2本のヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロと》アンサンブル・マドレーヌ／サント・コロンプ：追悼曲、ジェンキンス：組曲 イ調 他
6	5/30	《古典調律法ピアノによる独奏とドイツ歌曲独唱》谷村 晃、合田 清、合田衣佐子 他／ベートーヴェン：すべての長調を通過する前奏曲 他
7	7/11	《バロックを中心とした室内楽の集い》北村 郎、ターヘ室内合奏団／ヴィヴァルディ：リコーダー協奏曲 へ長調 他
8	9/12	《2つのアンサンブルによるバロックのひととき》アンサンブル・ピボー、アンサンブル・アルマジロ、北山 隆 他
9	10/9	《リコーダー・ガンバ・チェンバロによるバロックの調べ～2つの調律法を使って～》アンサンブル・マドレーヌ／フォンタナ：ソナタ ハ長調 他
10	10/23	《ダンス・リネサンス合奏団 第7回定期演奏会》イギリス・ルネサンスのミサ曲と世俗曲 畑 儀文、高橋圭子
11	11/20	《ルネサンスバロックの宗教曲とマドリガル》ロベルト・ブリーゲン指揮、カペラ・ノヴァ コーラス 他／ラッソ：エレミア哀歌 他
12	11/28	《芦屋室内合奏団 第17回定期演奏会》モーツァルト：ディヴェルティメント 二長調、クラリネット五重奏曲 イ短調 他
13	12/11	《クリスマス・キヨロル集》神戸コンサート、神戸YMCAハンドベル・クワイヤー
14	1983 2/27	《天使の声は実在するか》音楽同人・ホリゾント（谷村 晃、中野敬子、松井智恵、西村喜子、大岩みどり）
15	4/24	《2つのアンサンブルによるバロックのひととき第2回》アンサンブル・ピボー、アンサンブル・アルマジロ、北山 隆 他
16	5/8	《バロック音楽の楽しみ～テレマンを中心に～》中村洋彦、神谷 徹、中村佐和子、西村喜子、大岩みどり
《鈴木雅明によるチャペルコンサート・シリーズ始まる》		
17	11/3	《オルガン奉獻記念Ⅰ》鈴木雅明／クレランボー：第2組曲、グリニー：来たれ、聖霊、メシアン：鳥の歌 他
18	11/3	《オルガン奉獻記念Ⅱ》トン・コープマン／バッハ：トリオ・ソナタ 二長調、バルバストル：メルセイエーズ 他
19	11/4	《オルガン奉獻記念Ⅲ》トン・コープマン／修道院のためのミサ曲全曲、バッハ：パッサカリア 二短調 他
20	11/5	《オルガン奉獻記念Ⅳ》エリザベート・ガルニエ／シャイデマン：涙のバヴァースによる変奏曲 他
21	11/23	《林 佑子 オルガン・リサイタル》クレランボー：第2旋法による組曲、クーブラン：ミサ曲より、グリニー：ミサ曲より 他
22	12/20	《鈴木雅明 オルガン・リサイタル》バッハ：幻想曲ハ短調、ダカン：ノエル、ルベーク：クリスマス歌がやって来た 他
23	1984 3/3	《鈴木雅明 チェンバロ・リサイタル》クーブラン：組曲 へ長調、バッハ：バルティータ 第4番 他
24	3/19	《ジョス・ファン・インマゼール オルガン・リサイタル》パーセル：ヴォランタリー ト長調、ギボンズ：4声のファンタジア 他
25	4/3	《バッハとその周辺Ⅰ～ヘンデル～》有田正広、鈴木秀美／ヘンデル：ハレ・ソナタ 第2番、バッハ：フルート・ソナタ 他
26	4/21	《主の受難と復活を記念して》鈴木雅明、鈴木 環／クーブラン：エレミア哀歌、バッハ：トッカータ、アダージョとフーガ 他
27	4/29	《2つのアンサンブルによるバロックのひととき 第3回》アンサンブル・ピボー、アンサンブル・アルマジロ、北山 隆 他
28	5/19	《鈴木雅明 オルガン・リサイタル》～フレスコバルディからヴィヴァルディまで フレスコバルディ：聖体拝領のトッカータ 他
29	6/16	《廣野嗣雄 オルガン・リサイタル》グリニー：来たれ聖霊なる救い主、バッハ：プレリュードとフーガ ハ長調 他
30	7/14	《バッハとその周辺Ⅱ～息子たち～》有田正広、鈴木秀美、鈴木雅明／C.P.E.バッハ：無伴奏フルート組曲 イ短調 他
31	9/15	《バッハとの邂逅～北ドイツの場合》鈴木雅明Org／ベーム：カプリチオ、ブクステフーデ：いざ来ませ異邦人の救い主 他
32	10/20	《バッハとの邂逅～フランスの場合》鈴木雅明Org／マルシャン：組曲 二短調、グリニー：パンジェ・リングア 他
33	11/17	《バッハとの邂逅～ロマン派の場合》鈴木雅明Org／シューマン：BACHの名によるフーガ、メンデルスゾーン：ソナタ 第6番 他
34	1985 4/6	《主の受難と復活を記念して》鈴木雅明、鈴木 環、鈴木順子、西村喜子／クーブラン：ルソンド・テネブル 他
35	5/25	《フレナ・ルツ オルガン・リサイタル》ダジャンクール：第5旋法による組曲、バッハ：トリオソナタ 第4番 ホ短調 他
36	6/15	《生誕300周年記念 バッハ、ヘンデル、スカルラッティのタベ》鈴木雅明Cemb/Org
37	9/28	《生誕300周年 松蔭バハチクルスⅠ 今仲幸雄 バリトン・ソロカンタータのタベ》カンタータBWV 56, 82, 158, 159
38	10/15	《生誕300周年 松蔭バハチクルスⅡ 鈴木秀美 無伴奏チェロ組曲》組曲 第1、4、6、3番
39	11/10	《生誕300周年 松蔭バハチクルスⅢ 鈴木雅明 オルガン・ミサ全曲》
40	11/23	《生誕300周年 松蔭バハチクルスⅣ 佐々木正利 テノール・ソロカンタータのタベ》カンタータBWV 55, 189（偽作）、102
41	12/4	《生誕300周年 松蔭バハチクルスⅤ トン・コープマン オルガン／チェンバロ・リサイタル》トッカータとフーガ 二短調 他
42	1986 3/29	《主の受難を覚えて～故平島達司先生に捧ぐ》鈴木雅明、松蔭室内合唱団、畑 儀文 他／シェッツ：十字架上の七つの言葉
43	5/31	《トランペットとオルガンの世界》田宮堅二、鈴木雅明、ダンドリュー：ソナタ 二短調、パーセル：ソナタ 二長調
44	6/28	《イタリアン・チェンバロ オープニング・コンサート》鈴木雅明／スカルラッティ：ソナタ、ロッシ：トッカータ、スウェーリンク：緑の菩提樹の下で
特別	7/6	《平島達司先生追悼、ゼロビート・コンサート》鈴木雅明、芦屋室内合奏団、西垣正信、小出信也、杉谷昭子、松蔭室内合唱団 他



Masaaki Suzuki



Ton Koopman



Jos van Immerseel



Emma Kirkby & Anthony Rooley



Michael Radulescu

45	1986 9/27	《デュオのタベⅠ》鈴木雅明、今仲幸雄／ゼレンカ：エレミアの哀歌より、クーナウ：聖書ソナタ、シュテルツェル：深き淵より 他
46	10/25	《デュオのタベⅡ》エマ・カークビー、アントニー・ルーリー／モンテヴェルディ：あの高慢な眼差し、ラニアー：ヘロとアンドロス 他
47	11/29	《デュオのタベⅢ》有田正広、平尾雅子／マレ：ラ・フォリア クーブラン：愛のうぐいす 他
48	1987 4/18	《イースター、バッハのタベ》鈴木雅明、松蔭室内合唱団、バッハ・コレギウム・KOBÉ／カンタータBWV 12、モテットBWV 227 他
49	5/16	《クーブランVSバッハ》鈴木雅明／F.クーブラン：教区のためのミサ 全曲
50	6/20	《クーブランVSバッハ》鈴木雅明／バッハ：18のライプツィヒ・コラール（抜粋）、パッサカリアとフーガ ハ短調 他
51	10/17	《バッハ・カンタータのタベ》鈴木雅明、松蔭室内合唱団、バッハ・コレギウム・KOBÉ、畑 儀文、今泉仁志、他／BWV 127, 39, 147
52	11/4	《トン・コープマン オルガン・リサイタル》バッハ：バビロンの川のほとり、前奏曲とフーガ ハ短調、ツィボリ：パストラーレ 他
53	1988 4/16	《バッハ・カンタータのタベ》鈴木雅明、松蔭室内合唱団、バッハ・コレギウム・KOBÉ、畑 儀文、今泉仁志 他／BWV 12, 182, 146
54	5/21	《華麗なるトッカータの世界》鈴木雅明Org／フレスコバルディ、ロッシ、ブクステフーデ、バッハほかのトッカータ
55	6/18	《聖書の歌》鈴木 環、鈴木雅明、李 善銘／ブラームス：ひそかなる憧れ、聖なる子守歌、11のコラールより、ドヴォルザーク：聖書の歌 他
56	9/13	《ビート・ケー オルガン・リサイタル》作者不詳：エスタンピ、ギラン：第2旋法による組曲、バッハ：ファンタジア ト長調 他
57	9/16	《ミヒャエル・ラドウスク オルガン・リサイタル》ティトウルーズ：祝せられよ海の星、ムファット：シャコンヌ、トッカータ 他
58	10/16	《バッハ・カンタータのタベ》鈴木雅明、松蔭室内合唱団、バッハ・コレギウム・KOBÉ、畑 儀文、水野賢司 他／BWV 102, 82, 187 他
59	1989 3/25	《主の受難を覚えて～エレミア哀歌》松井智恵、鈴木 環、今村泰典、平尾雅子、鈴木雅明／クーブラン：ルソンド・テネブル 他
60	4/16	《今村泰典 リュート・リサイタル》カプスベルガー：キタローネ曲集 第4巻より、ドウ・ヴィゼー：組曲 イ短調、ヴァイス：ソナタ イ短調 他
61	5/20	《来ませ、聖霊、主なる神》鈴木雅明Org／ヴェクスマン、ブクステフーデ、グリニー、バッハ「来ませ、聖霊、主なる神」 他
62	6/24	《バッハ・カンタータのタベ》鈴木雅明、松蔭室内合唱団、バッハ・コレギウム・KOBÉ、畑 儀文、今泉仁志、他／BWV 17, 33, 186
63	10/21	《中村洋彦 フラウト・トラヴェルソ・リサイタル》平尾雅子、鈴木雅明／ヘンデル：ソナタ 二長調、オトテール：組曲 ト長調 他
64	11/17	《ゴシックから現代まで》鈴木雅明Org／シュリック：サルヴェレジーナ、近藤 譲：ダンス、カペソン：皇帝の歌による変奏曲 他
《バッハ・コレギウム・ジャパン（※以下BCJ）に改称、4/16 いずみホールにて旗揚げ公演》		
65	1990 5/31	《鈴木雅明 オルガン・チェンバロ 名曲コンサート》ヘンデル：ファンタジア、スウェーリンク：涙のバヴァース、バッハ：トッカータとフーガ 二短調 他
66	6/30	《ミヒャエル・ショッパー パス・リサイタル》鈴木雅明Fp／シェーベルト：『冬の旅』全曲
67	9/15	《バッハ・カンタータのタベ》鈴木雅明BCJ、西内美登里、鈴木 環、畑 儀文、今泉仁志 他／BWV 7, 8, 114
68	10/20	《ヴォルフガング・ダルマン オルガン・リサイタル》アレトリウス：神はわがやぐら、ブクステフーデ：パッサカリア
69	11/11	《ビート・ケー オルガン・リサイタル》ヴァルター：バルティータ、ブクステフーデ：パッサカリア、バッハ：パッサカリアとフーガ 他
70	1991 4/6	《マックス・ファン・エグmont バリトン・リサイタル》平尾雅子、鈴木雅明／パーセル：東の間の音楽、番霞よりも甘く 他
71	5/18	《フランスとスペインのオルガン音楽》鈴木雅明／アラウホ：第2旋法によるディエント、グリニー：ミサ曲より 他
72	6/15	《ソプラノ・デュエットとマドリガーレのタベ》月岡聖芳、西内美登里、鈴木雅明BCJ／モンテヴェルディ：ああ、苦しい別れ 他
73	9/21	《鈴木秀美 無伴奏チェロのタベ》ガブリエリ：リチェルカーレ第1、5、6番、バッハ：無伴奏チェロ組曲 第5、6番 他
74	10/5	《モンテヴェルディ：倫理的・宗教的な森》鈴木雅明BCJ、平尾雅子、福沢 宏、中野哲也／グローリア 他
特別	10/19	《イタリアン・バロックの輝き》山縣さゆり、鈴木秀美、鈴木雅明／カステロ：ソナタ 第2番、ウッチェリーニ：ソナタ 他
75	10/31	《ミシェル・シャビュイ オルガン・リサイタル》グリニー：『日のいずるところ』より、クーブラン：『修道院のミサ』より 他
《教会カンタータ・シリーズ》を中心とした定期演奏会始まる》		
76	1992 4/17	《ブクステフーデ：我がイエスの四肢》鈴木雅明BCJ、栗栖由美子、小池久美子、雁部伸枝、片野耕喜、小原浄二
77	5/9	《コルネットの醍醐味》ブルース・ディッキン、濱田芳道、平尾雅子、鈴木雅明／ロヴェッタ：ソナタ、スカラニ：ソナタ 他
78	6/13	《鈴木雅明 オルガン・リサイタル》バッハ：オルガン・ミサ（全曲）
79	7/4	《バッハ：教会カンタータ全曲シリーズ（※以下 カンタータ・シリーズ）1～愛する神の摂理にまかせ》鈴木雅明BCJ、栗栖由美子、雁部伸枝、畑 儀文、水野賢司／カンタータBWV 93, 177, 30 他
80	9/26	《ヨーロッパ・オルガン音楽の百花繚乱》鈴木雅明／スカルラッティ：ソナタ、パーセル：ヴォランタリー 他
81	10/17	《カンタータ・シリーズ 2～マリアの賛歌》鈴木雅明BCJ、栗栖由美子、西内美登里、S.ブヴァルダ、M.v.エグmont／BWV 147、マニフカト
82	10/18	《カンタータ・シリーズ 3～我々は満ち足りり》鈴木雅明、M.v.エグmont、S.ブヴァルダ／BWV 35、82 他
特別	1993 1/19	《鈴木雅明 チェンバロ・リサイタル》バッハ：平均律クラヴィアー曲集 第1巻（全曲）
83	4/3	《バッハ：ヨハネ受難曲》鈴木雅明BCJ、佐々木正利、多田輝道夫、ミヒャエル・ショッパー、栗栖由美子、太刀川昭、片野耕喜
84	6/5	《カンタータ・シリーズ 4～ライプツィヒ・カンタータの諸相と成熟》鈴木雅明BCJ、栗栖由美子、雁部伸枝、波多野均、水野賢司／BWV 94, 138, 97
85	9/11	《音楽の森と花束》鈴木雅明BCJ 他／モンテヴェルディ：6声のミサ、フレスコバルディ：『音楽の花束』 他
86	10/10	《ビート・ケー オルガン・リサイタル》バッハヘルベル：トッカータとフーガ 二短調 他
87	10/15	《カンタータ・シリーズ 5～死と向かい合うひととき》鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、穴澤ゆう子、雁部伸枝、石井健三、吉川誠二、萩原 潤／BWV 106, 161, 8



Yasunori Imamura



Michael Schopper



Max van Egmond



Michel Chapuis



Piet Kee

特別	1993	11/20	《オルガン奉獻10周年記念》トン・コブマン、鈴木雅明、ゲスト：マルク・ガルニエ／クーブラン：修道院のためのミサ曲 他
特別		11/28	《ヴェネツィアの栄光～ガブリエリをめぐるヴェネツィア音楽》コンチェルト・バラティエノ、鈴木雅明／ガブリエリ：6声のカンツォン 他
88		12/12	《ボッケリーニを囲んで》鈴木秀美、ライナー・ツィバーリンク、鈴木雅明／ボッケリーニ：チェロ・ソナタ 変ロ長調、ハ長調 他
89	1994	4/9	《オルガンとカンタータの世界》鈴木雅明BCJ、M.フリンマー、K.ヴェッセル、P.コイ 他／BWV 32, 170, 82 他
90		4/16	《マリー＝クレール・アラン オルガン・リサイタル》パッハ：フーガの技法
91		5/21	《来たれ、創造主なる聖霊》鈴木雅明Org／ティトウルズ、グリニー：「来たれ、創造主なる聖霊」 他
92		6/11	《ウィリアム・バードの世界》鈴木雅明BCJ／バード：3声、6声のミサ曲 他
93		7/2	《カンタータ・シリーズ 7～三位一体後第8主のカンタータ》鈴木雅明BCJ、穴澤ゆう子、石井健三、小笠原美敬、萩原 潤／BWV 178, 136, 45 他
94		10/22	《カンタータ・シリーズ 8～ライブツィヒ1726年》鈴木雅明BCJ、栗栖由美子、米良美一、石井健三、萩原 潤／カンタータBWV 47, 187, 102
95		11/28	《テオ・イエエル オルガン・リサイタル》パッハ：トッカータ・アダージョとフーガ、トリオ・ソナタ 第4番 他
特別	1995	3/21	《我ら苦難の極みにある時も》鈴木雅明BCJ／パッハ：我ら苦難の極みにある時も 他
96		4/18	《オーボエ・トリオによる音楽の花束》M.ボンセル、北里孝浩、福沢 宏、小島芳子／ファッシュ：トリオ、クーブラン：コンセル第11番 他
97		5/26	《モンテヴェルディとパッハ》鈴木雅明BCJ／モンテヴェルディ：6声のミサ曲、パッハ：モテットBWV 227
98		6/17	《鈴木雅明 オルガン・リサイタル》グリニー：オルガン曲集 第1巻
《BISとのレコーディング開始を契機に、年代順のカンタータ演奏はじまる》			
99		7/1	《カンタータ・シリーズ 10～ミュールハウゼン時代Ⅰ》鈴木雅明BCJ、栗栖由美子、太刀川昭、米良美一、片野耕喜、P.コイ、コンチェルト・バラティエノ／BWV 4, 196, 150 他
100		9/16	《モンテヴェルディ：聖母マリアのタベの祈り》鈴木雅明BCJ、栗栖由美子、鈴木美登里、米良美一、M.v.アルテナ、H.v.ベルネ、小笠原美敬、コンチェルト・バラティエノ 他
101		10/1	《ビーバー：ロザリオのソナタ》若松夏美、鈴木雅明、福沢 宏
102		11/11	《カンタータ・シリーズ 11～ミュールハウゼン時代Ⅱ》鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、柳沢亜紀、米良美一、G.テュルク、P.コイ 他／BWV 71, 131, 106
103	1996	4/13	《カンタータ・シリーズ 13～ヴァイマル時代Ⅰ》鈴木雅明BCJ、栗栖由美子、米良美一、櫻田 亮、P.コイ／BWV 12, 54, 162, 182
104		5/11	《ヴァイマル時代の出会い》鈴木雅明BCJ神戸／テレマン、ヴァルター、ゼレンカ
105		6/29	《カンタータ・シリーズ 14～ヴァイマル時代Ⅱ》鈴木雅明BCJ、柳沢亜紀、鈴木美登里、太刀川昭、櫻田 亮、S.シュレッケンベルガー／BWV 163, 165, 185, 199
106		10/26	《シュッツ：宗教的合唱曲集》鈴木雅明、BCJ合唱団 他
107		11/9	《カルヴァン詩篇歌をめぐって》鈴木雅明、BCJ神戸メンバー／スウェーリンク 他
特別		12/24	《ヘンデル：メサイア》(コヴェントガーデン版) 鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、米良美一、J.エルウィス、D.トーマス
108	1997	2/11	《カンタータ・シリーズ 15～ヴァイマル時代Ⅲ》鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、米良美一、櫻田 亮、小笠原美敬／BWV 18, 161, 155, 152
109		3/29	《ブクステフーデ：我らがイエスの四肢》《シュッツ：十字架上の七つの言葉》鈴木雅明BCJ
110		4/26	《長谷川美保 オルガン・リサイタル》ムファット、パッハ 他
111		5/10	《音楽のマニエリスム》鈴木雅明、ヴォックス・フマーナ／ジェズアルドのマドリガーレ
112		6/7	《カンタータ・シリーズ 16～ヴァイマル時代Ⅳ》鈴木雅明BCJ、緋田芳江、鈴木美登里、柳沢亜紀、米良美一、G.テュルク、P.コイ／BWV 21, 31, 172
113		7/21	《カンタータ・シリーズ 17～ヴァイマル時代Ⅴ》鈴木雅明BCJ、I.シュミットヒューゼン、米良美一、櫻田 亮、P.コイ／BWV 61, 63, 132, 143
114		9/15	《カンタータ・シリーズ 18～ライブツィヒ時代1723-Ⅰ》鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、米良美一、G.テュルク、P.コイ／BWV 22, 23, 75
115		10/25	《パッハ：モテット》鈴木雅明BCJ／BWV 225-229
116		11/15	《鈴木雅明 チェンバロ・リサイタル》パッハ「バルティータ」全曲
117	1998	2/21	《主の受難を覚えて》鈴木雅明、ヴォックス・フマーナ／ラッソ：スターバト・マーテル
118		4/19	《ジャック・ファン・オールドメルセン オルガン・リサイタル》バーム、バルバートル 他
119		5/5	《ダン・ラウリン ヘンデル：リコーダー・ソナタ》鈴木雅明、鈴木秀美
120		6/27	《カンタータ・シリーズ 19～ライブツィヒ時代1723-Ⅱ／Vn協奏曲Ⅰ》鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、R.ブレイズ、G.テュルク、浦野智行、寺神戸亮、若松夏美／BWV 76, 24, 167 他
121		9/5	《カンタータ・シリーズ 20～ライブツィヒ時代1723-Ⅲ／Vn協奏曲Ⅱ》鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、K.ヴェッセル、櫻田 亮、P.コイ、寺神戸亮、M.ボンセル／BWV 136, 46, 138, 95 他
122		9/19	《鈴木雅明 チェンバロ・リサイタル》パッハ：インヴェンションとシンフォニア
123		10/24	《ビート＝ケー オルガン・リサイタル》ブクステフーデとパッハ
124		11/7	《シャイン：イスラエルの泉》鈴木雅明、ヴォックス・フマーナ
125		12/5	《ドイツ・バロックのマニフィカト》鈴木雅明BCJ、M.バージョン、野々下由香里、太刀川昭、G.テュルク、浦野智行／クナウ、ゼレンカ、パッハ
126		12/12	《フランス・バロックの精華》ジェラルド・レーヌ、イル・セミナリオ・ムジカール



Hidemi Suzuki



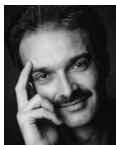
Marie-Claire Alain



Natsumi Wakamatsu



Peter Koopj



Gerd Türk



"The Messiah", Dec 1996

127	1999	2/20	《カンタータ・シリーズ 21～ライブツィヒ時代1723-Ⅳ》鈴木雅明BCJ、M.バージョン、R.ブレイズ、櫻田 亮、P.コイ／BWV 179, 105, 186
128		6/6	《カンタータ・シリーズ 22～ライブツィヒ時代1723-Ⅴ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コイ、コンチェルト・バラティエノ／BWV 25, 64, 147
129		7/3	《モンテヴェルディ：倫理的・宗教的な森》鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、野々下由香里、波多野睦美、太刀川昭、櫻田 亮、谷口洋介、浦野智行、小田川哲也
130		9/23	《雅なる宴》～フレンチ・カンタータ・シリーズとその時代 緋田芳江 他／クレランボー 他
131		10/9	《カンタータ・シリーズ 23～ライブツィヒ時代1723-Ⅵ》鈴木雅明BCJ、緋田芳江、K.ソレク＝アヴェラ、櫻田 亮、P.コイ／BWV 69a, 77, 119
132		11/3	《鈴木雅明 オルガン・リサイタル》ブクステフーデとJ.S.パッハ
133		12/4	《若松夏美・小島芳子 デュオ・リサイタル》モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ
134		12/18	《モンテヴェルディ：聖母マリアの塔への祈り／6声のミサ》鈴木雅明BCJ、コンチェルト・バラティエノ、鈴木美登里、野々下由香里、緋田芳江、波多野睦美、穴澤ゆう子、G.テュルク、S.V.ディク、谷口洋介、S.マクラウド、小笠原美敬
135	2000	2/26	《カンタータ・シリーズ 24～ライブツィヒ時代1723-Ⅶ》鈴木雅明BCJ、鈴木美登里、R.ブレイズ、G.テュルク、浦野智行／BWV 48, 89, 148, 109
136		4/22	《パッハ：マタイ受難曲》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、鈴木美登里、波多野睦美、K.ソレク＝アヴェラ、J.コボウ、鈴木 准、P.コイ、浦野智行
137		5/27	《パッハ：ブランデンブルク協奏曲》鈴木雅明BCJ
138		6/10	《ダン・ラウリン リコーダー・リサイタル》ファン・アイク：「笛の楽園」より
139		9/16	《カンタータ・シリーズ 25～ライブツィヒ時代のカンタータ・シリーズ、1723-Ⅷ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、波多野睦美、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コイ／BWV 40, 60, 70, 90 他
140		10/14	《鈴木雅明&鈴木秀美 ジョイント・リサイタル》～ヴィヴァルディとJ.S.パッハ～
141		11/11	《カンタータ・シリーズ 26～ライブツィヒ時代1723-Ⅷ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、櫻田 亮、J.クプファー／BWV 194, 1068 他
142		11/25	《長谷川美保 オルガン・リサイタル》スウェーリンク：ヘクサコード・ファンタジア 他
143	2001	3/10	《カンタータ・シリーズ 27～ライブツィヒ時代1724-Ⅰ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コイ／BWV 73, 144, 153, 154, 181 他
144		4/14	《17世紀ドイツ・プロテスタントの受難曲》鈴木雅明BCJ、櫻田 亮、浦野智行／シュッツ：マタイ受難曲、デマンツィウス：ヨハネ受難曲 他
145		5/19	《カンタータ・シリーズ 28～ライブツィヒ時代1724-Ⅱ》鈴木雅明BCJ、R.ブレイズ、櫻田 亮、P.コイ、浦野智行／BWV 66, 134, 67 他
146		6/10	《トウキョウ・バロック～マラン・マレの肖像》寺神戸 亮、上村かおり、S.ヘンストラ／「音階」、ソナタ「ラ・マレジェンヌ」
147		7/7	《カンタータ・シリーズ 29～ライブツィヒ時代1724-Ⅲ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、櫻田 亮、S.マクラウド／BWV 37, 86, 166, 104 他
148		9/2	《ジャン・ボワイエ オルガン・リサイタル》クーブラン：教区のミサ、グリニー：「来たれ、創造主なる聖霊」
149		9/22	《カンタータ・シリーズ 30～ライブツィヒ時代1724-Ⅳ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、波多野睦美、G.テュルク、P.コイ／BWV 44, 59, 184, 173 他
150		10/8	《鈴木雅明 チェンバロ・リサイタル》～フローベルガーとJ.S.パッハ バルティータ第6番 他
151		12/15	《パッハ：クリスマス・オラトリオ(全曲)》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、J.コボウ、S.マクラウド
152	2002	1/12	《初期イタリア・バロックの精華》ダン・ラウリンRec. 鈴木雅明／カステッロ：ソナタ 他
153		2/11	《カンタータ・シリーズ 31～ライブツィヒ時代1724-Ⅴ》鈴木雅明BCJ、R.ブレイズ、J.ギルグリス、P.コイ／BWV 65, 81, 83, 190 他
154		4/20	《カンタータ・シリーズ 32～ライブツィヒ時代1724-Ⅵ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、J.コボウ、P.コイ／BWV 20, 7, 94
155		5/18	《寺神戸亮&シムレフ・アド＝エル》～ロ短調のメランコリア パッハ：BWV 1014, 1019, C.P.E.パッハ：wq76 他
156		6/1	《カンタータ・シリーズ 33～ライブツィヒ時代1724-Ⅶ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、M.ホワイト、櫻田 亮、浦野智行／BWV 10, 93, 107, 178 他
157		6/22	《鈴木雅明 オルガン・リサイタル》～パッハ「オルガン小曲集」～ 鈴木雅明、緋田芳江、丸谷晶子
158		7/21	《真夏のヘンデル～新発見グロリアの煌き》鈴木雅明BCJ、天羽明恵 他／ヘンデル：グロリア、ディクスイット・ドミヌス 他
159		9/7	《カンタータ・シリーズ 34～ライブツィヒ時代1724-Ⅷ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コイ／BWV 8, 33, 113 他
160		11/4	《鈴木雅明 オルガン・リサイタル》～月明かりの音楽帖 グリニー「来たれ、創造主なる聖霊」 他
161	2003	1/13	《鈴木雅明 チェンバロ・リサイタル》～J.S.パッハ：フーガの技法
162		2/15	《カンタータ・シリーズ 35～ライブツィヒ時代1724-Ⅸ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、D.テイラー、櫻田 亮、P.コイ／BWV 78, 99, 114 他
163		4/26	《ファンタズム》～ロンドン発、究極の癒しの音楽～ ファンタズム(ガンバ・コンサート)／モーツァルト他
164		6/7	《カンタータ・シリーズ 36～ライブツィヒ時代1724-Ⅹ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、T.ケンウォージー＝ブラウン、櫻田 亮、P.コイ／BWV 96, 122, 180 他
165		7/24	《ドラマ・ベルムジカ》～パッハの音楽劇 鈴木雅明BCJ、C.サンブソン、櫻田 亮、S.シュレッケンベルガー／コーヒー・カンタータ&結婚カンタータ 他



Dan Laurin



Robin Blaze



Yukari Nonoshita



Jan Kobow



Makoto Sakurada

166	2003	9/6	《カンタータ・シリーズ 37～ライブツィヒ時代1724-XI》鈴木雅明BCJ、S.リディーン、P.ベルタン、G.テュルク、P.コーイ／BWV 5, 80, 115 他
167		10/4	《バッハ家の音楽会》鈴木雅明、野々下由香里、若松夏美、前田りり子、福沢 宏／『音楽の捧げ物』より 他
特別		11/1	《オルガン奉獻20周年記念 礼拝&記念演奏会》鈴木雅明、大塚直哉、上野静江
特別		11/24	《オルガン奉獻20周年記念 ハラルド・フォーゲル公開講演&リサイタル》シャイデマン 他
168		12/6	《オルガン奉獻20周年記念 鈴木雅明 オルガン・リサイタル》グリニー：オルガン曲集 第1巻 全曲
169	2004	3/20	《カンタータ・シリーズ 38～ライブツィヒ時代1724-XII》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、櫻田 亮、P.コーイ／BWV 139, 26, 116, 62 他
170		4/29	《カルヴィン・ステイバート特別講演／鈴木雅明 オルガン・リサイタル～来たれ、聖霊、主なる神～》BWV 651, 652, 768 他
171		5/22	《バッハ：復活祭オラトリオ／昇天祭オラトリオ》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、P.V.フートヘム、J.コボウ、浦野智行／BWV 249, 11 他
172		6/26	《カンタータ・シリーズ 39～ライブツィヒ時代1724-XIII》鈴木雅明BCJ、D.ミールズ、P.ベルタン、G.テュルク、P.コーイ、コンチェルト・バラティエノ／BWV 2, 135, 38, 3 他
173		7/3	《ブルース・ディッキー 魅惑のコルネット》ブルース・ディッキー、今井奈緒子
174		9/11	《カンタータ・シリーズ 40～ライブツィヒ時代1724-XIV》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コーイ、コンチェルト・バラティエノ／BWV 101, 91, 121, 133 他
175		10/9	《桐山建志 & 大塚直哉 ～コレルリとバッハ》桐山建志Vn、大塚直哉Cem／BWV 1017, 1023 他
176	2005	1/22	《鈴木雅明 チェンバロ・リサイタル》バッハ：平均律クワヴィア曲集 第2巻(全曲)
177		2/19	《カンタータ・シリーズ 41～ライブツィヒ時代1725-I》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、A.ヴェラー、P.コーイ／BWV 123, 124, 111, 125 他
178		4/23	《カンタータ・シリーズ 42～ライブツィヒ時代1725-II》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、山下牧子、J.コボウ、D.ヴェルナー／BWV 130, 41, 92 他
179		5/21	《鈴木秀美 バッハ：無伴奏チェロ組曲》組曲 第1、4、6番
180		6/24	《カンタータ・シリーズ 43～ライブツィヒ時代1725-III》鈴木雅明BCJ、C.サンブソン、山下牧子、G.テュルク、P.コーイ／BWV 1, 126, 127 他
181		7/9	《神秘のオルガン音楽：スペインの黄金時代》鈴木雅明、野々下由香里、つのだけし
182		9/15	《カンタータ・シリーズ 44～ソロ・カンタータ①》鈴木雅明BCJ、C.サンブソン、R.ブレイズ／BWV 35, 51, 1127, 1083
183		11/26	《アンサンブル・ヴィンセント》三宮正満、前田りり子、荒木優子、懸田貴嗣、鈴木優人、お話：鈴木雅明／テレマン他
184	2006	2/25	《カンタータ・シリーズ 45～ライブツィヒ時代1725-IV》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、J.ギルクリスト、D.ヴェルナー／BWV 6, 42, 103, 108 他
185		3/11	《ゼロビートの再発見 ～平島達司教授を偲んで～》鈴木雅明、上野静江、大塚直哉
186		4/16	《バッハ：マタイ受難曲 初期稿》鈴木雅明BCJ、C.ランズハーマー、藤崎美苗、R.ブレイズ、上杉清仁、G.テュルク、J.クリュザー、P.コーイ、浦野智行
187		6/17	《戦いと平和の音楽～トランペットとオルガンの華麗なるひととき～》島田俊雄、村田綾子、鈴木雅明
188		7/22	《カンタータ・シリーズ 46～ライブツィヒ時代1725-V》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、櫻田 亮、P.コーイ／BWV 87, 128, 74, 176 他
189		9/23	《カンタータ・シリーズ 47～ソロ・カンタータ②》鈴木雅明BCJ、C.サンブソン、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コーイ／BWV 169, 55, 52, 58, 82
190		12/2	《16世紀における東西文化の邂逅～天正少年使節団が聴いた幻の響き～》解説：皆川達夫、鈴木雅明BCJ／A.ガブリエリ：『16声のミサ』 他
191	2007	2/10	《カンタータ・シリーズ 48～ライブツィヒ時代1725-VI》鈴木雅明BCJ、C.サンブソン、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コーイ、コンチェルト・バラティエノ／BWV 85, 103, 68, 175, 28 他
192		2/17	《コンチェルト・バラティエノ “主に向かい新しき歌をうたえ”》ゲルト・テュルク、寺神戸 亮、鈴木優人
193		4/7	《バッハ：ヨハネ受難曲 第4稿》鈴木雅明BCJ、J.プファイファー、D.ヴェルナー、野々下由香里、D.テイラー 他
194		5/26	《没後300年ブクステフーデ・プロジェクト～カンタータとオルガンの荘厳な響き》鈴木雅明、野々下由香里、青木洋也、浦野智行、高田あずみ、荒木優子、武澤秀平
195		6/9	《カンタータ・シリーズ 49～ライブツィヒ時代1725-VII》鈴木雅明BCJ、野々下由香里、R.ブレイズ、櫻田 亮、P.コーイ／BWV 137, 164, 168, 79 他
196		9/15	《カンタータ・シリーズ 50～ソロ・カンタータ③》鈴木雅明BCJ、C.サンブソン、P.コーイ／BWV 84, 56, 82, 49
197		10/13	《没後300年ブクステフーデ・プロジェクト～ 鈴木雅明 オルガン／チェンバロ・リサイタル》
198	2008	2/9	《カンタータ・シリーズ 51～ライブツィヒ時代1726-I》鈴木雅明BCJ、R.ニコルズ、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コーイ／BWV 16, 13, 32, 72 他
199		5/10	《J.S.バッハとメンデルスゾーン I 鈴木雅明 オルガン・リサイタル》
200		7/26	《カンタータ・シリーズ 52～ライブツィヒ時代1725-VIII》鈴木雅明BCJ、H.ブラシコヴァ、R.ブレイズ、G.テュルク、P.コーイ／BWV 110, 57, 151, 158 他



Carolyn Sampson



Harald Vogel



Calvin Stapert



Bruce Dickey & Ryo Terakado



Concerto Palatino



Bach Collegium Japanとチャペルのある大学

神戸松蔭女子学院大学 学長 郡司 隆男

神戸松蔭チャペルコンサートが、今年、200回の公演を迎え、第200回目と第201回目を、本学のチャペルで生まれ育った、Bach Collegium Japan の演奏会で迎えることができるのは、大変に喜ばしいことです。

音楽大学でもない、神戸の小さな女子大になぜ、こんなに立派なオルガンがあるのか、また、なぜ、ここから世界的な演奏家や演奏団体が生まれたのか、この点については、鈴木雅明先生が詳しいことをお書きになっているので、そちらをご覧ください。

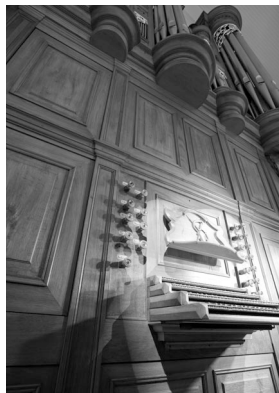
われわれ、このような価値のあるチャペルを受け継ぎ発展させていく立場にある者としては、これまでの偉業を称えるだけでなく、これからどのように活用していったらよいのかを考えていく必要があると思います。

考えてみれば、本学のチャペル、そして、Bach Collegium Japan は、いろいろな意味で「開かれた松蔭」の象徴であると考えられます。イギリス聖公会の宣教師 Hugh James Foss によって、日本の神戸に創設された女学校に、1世紀近くを経た後、フランスのオルガン建造者 Marc Garnier 氏製作によるオルガンを据えたチャペルができ、そこから、ドイツの Johann Sebastian Bach のカンタータ全曲録音をはじめとする演奏活動が続ける Bach Collegium Japan が生まれています。日本だから、日本風にとか、イギリス聖公会の大学だから、イギリス仕様で、フランスのオルガンだからフランス音楽中心で、というようなこだわりは一切なく、世界中から、優れたものはその価値を認めて、したたかにとりこむという姿勢が感じられます。さらに、CDはスウェーデンのクラシック専門レーベル BISから世界に向けて発売されており、日・英・仏・独・瑞の5か国に関わる国際的な演奏会場および演奏活動ということになるでしょう。



このような国際性は、まさに、鈴木先生の出身地でもある、神戸という土地柄にふさわしいものだと思います。Bach と言えば、もちろん、キリスト教との関係は深いものがあり、これもまた、ミッション系の女子大にはふさわしいものだと思います。

もう一つの「開かれた」側面は、大学と地域とのあり方に



関係します。200回もの公演を続けることができたのは、それを支える聴衆の皆さんがあったからこそです。女子大であるために、ふだんは学外の方の出入りを厳しくチェックせざるを得ませんが、キャンパスの中でもチャペルは例外的に学外に対して開かれている場所です。卒業生の結婚式のときには、当の卒業生以外にも多くの学外の方がお客様としていらっしやいますし、チャペルでの演奏会やレクチャーコンサートなどは、学外の方の来場がなくては成り立ちません。本学の中で数少ない、大学外の人たちとの触れあいの場をチャペルは提供していると思います。昨年からは、チャペルで、高校生による「英語で歌おう」コンテストをオープンキャンパスの日に開催するようになり、この素晴らしいチャペルを、より若い人

たちにも体験してもらえるようになりました。

私事にわたりますが、初めて買ったクラシックのLPレコードがBachの「管弦楽組曲」でした。演奏は Collegium Aureum という、オリジナル楽器の名手たちを集めたグループでした。当時、特にオリジナル楽器でなくてはというこだわりがあったわけではありませんが、偶然耳にした響きが心地よかった記憶があります。この演奏は、数年前、CDで復刻されていることを発見し、「管弦楽組曲」はもちろん、当時、レコードで買っていたものをいくつか買い直すことができ、懐しい思いで聞くことができました。

Bachの音楽の演奏に関しては、オリジナル楽器で演奏されるばかりでなく、チェンバロ曲がピアノで演奏されたり、さらに、ジャズにアレンジされたり、シンセサイザーや和楽器で演奏されたりすることも多くあります。そういう演奏は邪道であるとか、神聖なBachへの冒瀆だとか言って、非難する向きもあるようですが、個人的には、よい演奏ならば、どのような形態であってもよいと思います。素人考えですが、Bachの音楽には、どのような形でも生き残る、強固な部分があり、演奏形態に左右されない、一種のしなやかさをもっているように思います。実は、このような柔軟な強さこそ、女子大である本学の学生たちに是非身につけていてもらいたいあり方だと思っています。

話が少し音楽からそれてしまいましたが、このようなBachの名を冠した「楽団」である、Bach Collegium Japan、そして、それと深い関係にあるこのチャペルも、地域に、また世界に開かれた大学の象徴として、大事にしていきたい神戸松蔭の財産だと思います。



沿革

- 1892年 英国聖公会の伝道機関S.P.G.代表者H.J.フォス師らによって、神戸市北野町に「松蔭女学校」創立。
- 1915年 「松蔭高等女学校」設立。
- 1929年 神戸市青谷に校地を選定。定礎式に英国王子グロスター公殿下臨場。新校舎落成。
- 1947年 大学・短期大学の前身「松蔭女子専門学校」設立。初代校長は浅野勇。
- 1950年 学制改革によって「松蔭女子専門学校」は「松蔭短期大学」として新発足。キリスト教科、英文学科を置く。初代学長はアーサー・リー。その後、服飾学科、家政学科、日本文学科を増設。
- 1966年 神戸市垂水区に「松蔭女子学院大学」設置。文学部に英米文学科、国文学科、キリスト教学科を置く。初代学長は八代斌助博士。
- 1980年 六甲学舎第一期工事完成。短期大学が青谷から移転。続いて81年第二期工事が完成し、大学が垂水から移転。
- 1983年 チャペルにパイプオルガン設置。
- 1995年 「松蔭女子学院大学」「松蔭女子学院短期大学」を「神戸松蔭女子学院大学」「神戸松蔭女子学院短期大学」に校名変更。
- 2000年 大学院文学研究科(修士課程)を設置。大学文学部に総合文芸学科を増設。
- 2001年 大学文学部に心理学科を増設。
- 2002年 大学院文学研究科に言語科学専攻(博士課程)を設置。
- 2004年 大学院文学研究科に心理学専攻(修士課程)を増設。大学文学部心理学科を人間科学部心理学科に改組。
- 2005年 大学人間科学部に生活学科を増設。
- 2008年 大学人間科学部に子ども発達学科、ファッション・ハウジングデザイン学科を増設。

開かれた大学

英国国教会(聖公会)の伝道機関S.P.G.より派遣されたH.J.フォスは明治の男尊女卑社会にあって、女性も人間としての尊厳を享受できる教育が必要であると痛感し、1892年、神戸市北野町の三本松に「松蔭女学校」を設立しました。「松蔭」という名前の由来について、フォスは手紙の中で「これは松の蔭の学校という意味です。松は非常に日本的な樹木であり、慎み深さと貞節を意味します。その松の木蔭に乙女たちが住み、学んでいる姿が、この名前を通して私達が日本の人たちに伝えたい学校の理念なのです。」と書いています。

神戸松蔭女子学院大学は、ファッションブルな生活スタイルに満ちた国際都市神戸で、110余年にわたり、キリスト教の愛の精神に基づく教養教育をおこなってきました。

生涯教育の必要性が切実になってきた近年、世代を超えて互いに啓発し、学び合える場を設けることを目的とし、社会人特別入学、編入学制度を設けて社会での経験を積まれた方に対しても、広く門戸を開いています。また、チャペルコンサートや公開講座を実施、地域コミュニティとの連携を図り、広く「知」を開放しております。

公開講座

土曜講座、英会話講座、フランス語講座、体験型親子講座、親子フリースペース、ジュニア・テニス教室、キリスト教文化研究所公開講座、フランス語集中講座、夏季公開講座

コンサート、礼拝、音楽講座

神戸松蔭チャペルコンサート、神戸松蔭オルガン・レクチャーコンサート、神戸松蔭クリスマス・チャリティーコンサート、クリスマス・イブニング・コンサート、クリスマス・ツリー点灯式、クリスマス・キャンドル・サービス、パイプオルガン・チェンバロ体験レッスン、通奏低音ワークショップ、公募による合唱(とオーケストラ)の公開講座

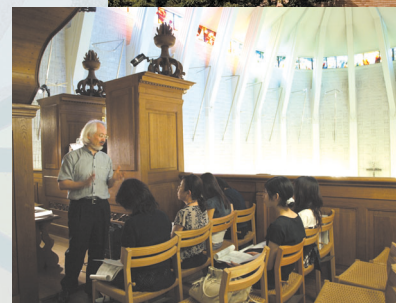
科目等履修生制度

教会音楽コース、フランス文化コース 他多数

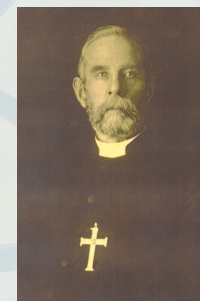
神戸ルミナリエとチャペル

阪神淡路大震災の復興のシンボルである「神戸ルミナリエ」の会場で流されている演出音楽の録音を1999年より毎年本学チャペルで行っています。

お問い合わせ:企画課 Tel.078-882-6159



パイプオルガンの授業風景



H.J.フォス主教



クリスマス行事



コンサート時に開店する
学生ボランティア・カフェ「リースヒェン」

神戸松蔭とバツハ・コレギウム・ジャパン
～神戸松蔭チャペルコンサート200回の歩み～

発行: 2008年9月20日
編集発行: 神戸松蔭女子学院大学
編集委員: 「神戸松蔭チャペルコンサート200回記念事業プロジェクト・チーム」
編集協力: バツハ・コレギウム・ジャパン